

平等性智

平等性智

頌に云はく、

一大理系の技條なる、自治の個性を末那とはす。

如來はすべてを自我として、平等性智に統べらる。

斯の性智は如來の一大理性なので、人の心理作用の理性に例すべき智にて、即ち大自我である。此性智は宇宙の一大心靈に萬物を統一し攝理する處の理性として存す。

一大心靈より發展せられたる世界には、因縁因果の理性として萬物生成の統一秩序を爲してをる。世界の因縁より分身派生せし衆生なれば、一切の個々にも、小は小乍ら自己統制自治體を爲してをる。故に自我である。

宇宙に物質精神界を統一攝理する理性即ち大我が存在し、一切の個々にも統制自治體をなさしむる理性あり。即ち法身の理性智と名づく。

大にしては宇宙全體より小にしては、衆生の個性に至る迄を三位に分けて性を明さば、

一、法身一大理性 二、世界因果性 三、衆生性

如來自己は絶對なる一大理性として萬有内存して萬有を統一攝理す。夫より發展せられたる一面を世界依他起性とす。相待的に因縁因果の理法として萬物生成の秩序を整ふ。三展せられて世界の因果に規定せられて生成したのが衆生性である。

法身の理性は萬物の複雑極まれるを統一し攝理する性を有して、また物質界と精神界即ち無形と有形とを統一攝理の理性あり。之即ち法身の性智である。

華嚴の理法界と事法界の中に、理法界とは今の法身一大理性なので、事法界とは宇宙現象界の有らゆる依正色心無數の差別の萬物である。其萬物には各々自己の特性を有して居る。差別の萬物を統一するの一大理性とは大海の水と波とに喩へられて居る。

一、法身の一大理性は萬物の根底

萬物の同一本性。植物と動物との同一本性

此地上に繁布せる處の植物と動物即ち依報と正報とは靜と動との反對なる兩性を現するけれども、斯兩物は同じく有機性即ち生物である。植物の營養機能は根が地中に在りて即ち下部に在り、動物の食物を攝取する口は上部に位してをる。又生殖の機能は動物は下部に在りて植物の枝條に咲く花は上位に在り。生殖を營むことは其位置が何れも反對なれども何れも營養と生殖との有機作用を以て生活する性に於て一致す。又此兩性の進化の起原に遡る時は同一原始の種性より起因すとは進化論者の説く處である。故に此兩性は同一性より兩方面に向つて進化したる結果に於て靜動相反する如きも、本同一性の相對的進化の兩性なりと云はざるべからず。故に同一本性と云ふことを得べし。

物心同一性

一切萬物は有形の物質と無形の心質との二性を出でず。此の物と心との兩質は同一本性の内外兩面の相対的現の二性なりと云ふことを得べし。同一體を外より見れば物質にして内觀する時は心質なりとす。此の兩性は無形無礙なると有形有礙なるとの反對なる兩性と爲るも、之が統一存在の本性に於て一致せざるべからず。是致一哲學の説く處である。

化學元素の一大元

又地上の一切萬有の元素なる化學の元素は現在世に發見せられたる物八十有餘の數に上りたるも、或説によれば悉く數多の元素は其の本炭酸水窒の四大元素に歸すべしと。又或説によれば一切元素の本源は一大元素に歸すべしと。其の一大元素が陰と陽との兩作用によりて、其れが因と縁との關係よりして種々の質の變化を生じ、現在の

元素に變化したるものとすと。

又萬物を構成する處の質糧と爲るべき物質の分子は其源原子の聚合たるものにて、原子はまた電子の聚合體であると。陰陽の數多の電子が相聚合して原子と爲り、また分子と爲りて、一切萬物を造作するものとす。又陰陽の兩性全く反對の性が相扶け相刺激して萬物を造る。即ち陰陽の二氣は大にしては太陽と地球の如く、小にしては電子の陰陽二性の如く、又一切生物界に於ては雌雄兩性の如く、全く相反對の性と能を有してをれども、然も互に相扶けて相成す。此兩性は其本源は同一本性の相待的に分れたるものである。

二 法身の一大理智

法身は宇宙一大理性にして一切差別性の本源なると共に、秩序的に萬物を組織し構成する理智の性が存することを認むることを得べし。若し法身にして一切智と一切能

との二屬性を具すと爲さざれば、一切萬物の生成化育の理を解すべからず。彼の天體無數の星宿の如き宇宙に常恆に創造建設の行はれてあるは、或る不思議者の手に依て成ると云はざるべからず。勿論宇宙に大工的の神の存在すとは思はれざるも、萬物内存の理智構成の存在は否定すること能はざるべし。是を小にして萬物中の一部分たる吾人の身體を構成するは因縁因果の理法によりて成りたるものなるも、恁の如くに因果の理法を爲すの內的理性は、萬物内存の一切智一切能の所作なりと云ふことと得べし。試みに吾人を構成する身體の四支五官五臟六腑等の一切の官能及組織の如何に解剖的にも生理的にも巧妙を極めたるを視よ。恁の如きの智能何人か驚嘆せざるものぞ。實に吾人の身體構成の複雑緻密なる、若し是を人工的に構成する物とせば最も完全なる智能がなくては出来ぬ。數學、解剖學、生理學、物理學、化學等の有ゆる完全なる智と最巧妙なる技能を有するに非れば、安んぞ能く之を構成することを得べきぞ。今吾人の身體の一部分たる腦髓の機關の解剖的組成について見るも、之を構成組織する

無數の細胞が複雑極りなく相成して其巧妙なる、有ゆる智と能とを完全に具備するに非れば亦も成すこと能はぬ。其の人工的種々の器械や器具藥品杯を要せずして、而も其の仕揚げの完全なるに至つては、如何なる智者の人間と雖驚嘆を禁せざるべし。恁の如きの造化の如きの大工神の造立と云はゞ、其の實在を疑ふ者あらんも、萬物内存在の一切智一切能の法身ビルシヤナの實在の説に就きては否定すること能はざるべし。之を要言すれば、萬物内存在の理性即ち一切智一切能の性が萬物に内存在して、其のすべてを統一し攝理し一切を生成するに秩序を爲し條理を爲す處の理性の存在を肯定せざるべからず。之を法身の一大理性また理智とす。

二 世界の相對的理性

宇宙に全一不可割の理性を以て萬物を統一し攝理するは、法身の屬性であることは已に論じぬ。此の絶對唯一の理性を絶對根底として、世界の方面には相待的の性能と

して現はれてをる。是を今世界性と名づく。本絶対唯一の理性より發展して相待的に現じては反對なる兩性と爲りて、相互に刺激しまた相資けて萬物を構成す。之を佛教にて因縁性とす。

本一の大理性より分れて相待の兩性と爲りて分業的に兩性能が相資相成して萬物造作の用を爲す。之の世界は相待規定の因縁の相關を以て一切を生ず。之を佛教にて因縁所生の法と爲す。

又世界の相對性とは、儒に謂ゆる大極兩儀を生ず、是である。陰と陽との二氣雌雄の二性、物質對心質、依報と正報との如き、本一大性より相待的に兩性を爲してをる。是を世界性と爲す。斯の兩性が因と縁とに依て萬物を構成す。

また法身萬物内存の一切智と一切能とが萬物を造化する作用が、世界の表面には因縁相依りて其れが時間的に因果律に萬物生成せらる。故に法身は一切智と一切能との作用と因縁因果律に萬物を造作すとは、同一物を内より觀たると外より觀たるとの差

異に外ならず。萬物に陰陽の二性が因縁に規定せられて、一切萬差の衆生法を生成化育す。

四 衆生性

本一大理性を根本とし、世界の相待なる因縁に規定せられ因果律に生成せらるゝ處の種々無量の生物あり。是を衆生性と名づく。衆生に無量あり。佛教には十法界を以て一切を包括して遺すことなし。十法界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を六凡と名づけ、また六道と云ふ。聲聞、緣覺、菩薩、佛陀之を四聖と名づく。十界の中初め六道は法身より出たる世界の性の上に在る衆生にて、本は善惡の兩面に善に三品下品は修羅道、中品は人間道、上品は天道である。惡の三品は地獄餓鬼畜生である。六道各性格を異にす。地獄には地獄の相と地獄の性がある。乃至人間は人間の相性を有す。天台大師は十界に各十界を具したまた十界毎に相、性、體、力、作、因、緣、果、

報、等、の十如を具してをる。乃至三千の理を以てすべての性相を談じてをる。其の説理想としては妙なりと雖今は略す。

五 衆生性の無盡（種類性の無盡）

地上に分布する處の一切の生物は其の種類實に無數である。其の植物動物共に無數の種類あり。例へば植物にても、樹木花草より菌屬に至る迄其の種類は衆多なることは植物分類學の示す處、動物にても陸栖水栖劣等なる動物より高等なる動物また精神生活の人類に至るまで、其の種類實に無數である。其の無數の種類に各々其の相の如くに性を具し、其の性の如くに體を具へ、其の體の如く力用を具へ、其の力用の如くに作用を爲してをる。實に其種類に隨つて性を異にす。有ゆる生物に種類性ある之を類性とす。人は人の性を具し、犬は犬の性を有しすべての類性あり。此の類性なるものを以て我とすれば、人我、畜生我、畜類も種々の類性の我を有つてをると云はねば

ならぬ。何にしても其の稟くる處の性質の異なる處は相貌の殊なる如くに差がある。是を衆生類性の無盡とす。

原始生物の單細胞の生物も自別自治を爲してをる已上は、個性をゆるさざることを得ぬ。されば之れ小我の形式を具備したものである。漸々に進化して種々の因縁よりして無數の種類に變化して、種々の生物と現化して各其類性を爲し小我を形成してをる。之を類性の無盡とす。

六 個性の特殊的

一切の生物に各々其種類の殊性を具してをると共に、其の同種類の中にも亦個々の特殊性を爲して居る。生物中の一類たる人類に就ては、最其特殊の個性が顯著である。其の有する個性の特殊なることは、容貌の異なる如くである。現在世界には幾十億の人あり、其の特殊の個性を具へてをる。地球上に人類ありてより已來實に無數恆沙の數

ならん。然るに恁く無數の人各の個性は皆特殊的にして恐らく一人として同一の者なからん。其は一切の人が其容貌より乃至一切の性質、體格、力量、作業悉く特殊の性を爲す。例へば人の指紋の特殊的なる如く一切の身體部分は皆それ〳〵の特殊性を有つてをる。是を類屬に分つときは、人類は人類として牛馬は牛馬として、皆それ〳〵類性の特殊性を有して、また各自に特殊の個性を爲す。因縁に至りては實に複雑極まりなき關係より來れり。其の因縁の一部たる遺傳の依りて來れる所を見るも無盡の關係を有つてをる。一人の人にも其の父母あり、其の父母にも亦父母あり、恁の如く展轉して其の父母の遺傳性の兩方の淵源に遡るときは、二十代三十代乃至百代の源に遡らば、實に何萬の血脈の混淆より、今此個性に遺傳し來れるかを見るとき、又各個の入胎前後の腹中の因縁其當時の四圍の事情が、悉く母の身心を通じて胎兒に及ぼせる影響より、出産しては種々四圍の因縁に薰染せられて各々の個性の特殊を成す事、若し之を個性成立の依て來れる因縁を嚴密に研究するときは、其の複雑なる實に人智の及

ばざる處である。是を華嚴には重々無盡の緣起と説てある。實に然りである。人類に於て既に然り、一切の生物其の資性に受けたる性格人類の如く複雑ならざるべきも、其の有機の內的性質の各個の特殊性を成すべき事は理に於て同じ。夫等を概して衆生性と名づく。是法身の一大理性より世界の因緣因果によりて無量無盡の衆生性と分れる所以である。

萬物の統攝

一大理性より發展せられたる世界の萬類には小なる者は大なる者に統攝せられ、下位の者は上位者に統制せらるゝ、理性存す。生物中の最微小の生物にも自己を統制する性を有つてをる。又人の身體中の一部分たる一毫も數多の細胞を聚めて一毫なる統制自治體を成してをる。而も他の個體の成分と混ぜぬ。其の統制は實により以上の部によりて統制せらる。例へば人の指は數多の物を以て組織して一指としての自治體を爲

してをる。其の指等を聚めて掌に統制せられ掌は臂や腕等を合して手と云ふ上位に統制せらる。而して幾多の手や足の如き、四肢五官五臟六腑等の一切が、自治體を爲して、相互に各自の職掌を掌りて混雜せず、自制自治して然も一の身體に統制せらる。故に一の身體中には數多の統制自治體を爲して居る。此の個體幾多かを聚合したる團隊を一家と云ふ統制自治體と爲す。更に幾多の家庭を聚合して一村落到統制せられ、其上に縣制あり又其の上に國家あり。尙數多の國は一地球に統制せられ、地球の如き衆多の惑星は一の太陽系に統一せられ、恁の如く展轉向大して宇宙全一の統一自治を法身毘廬遮那とす。

萬物自制自造

一大理性より分身派生せられたる萬物なればすべての有機性は各自に自制自發自造の性能を有つてをる。例へば實に微小なる一個の杉の果の種子を適當せる土地に播き

氣候の溫と潤とを與ふれば、遂に發芽して切めは僅かに二葉と二本の白根を生じたるも、漸次に發育するに隨て、枝を發展し枝より條と爲りまた葉を出し、此の枝條も外部より附したる物ならで、皆自己に有する勢能より發したるものにて、皆秩序的に成長するに隨つて枝より條、條より葉を出し、自發的に生育してをる。また動物にも自己の種子細胞の身體の四肢五官乃至一切の機能等各部分悉く具有して、夫れが成長するに隨つて秩序的に發達し、一毫一爪も他より附與を待たずして、自發的に自治自制自活である。一切の生物は個々皆一大法身より分身したる小法身なれば、大法身が大造化として、自治自制萬物を統攝する如くに、小法身は小造化として自制自造の作用を摸倣してをる。恁の如く大法身が統一攝理の性を有せる如く小法身が自己分限内のものを自制自發的に造化の性能を有してをる。實に不可思議である。

七 小我 末那

一切の生物其種々の階級に互りて高く發達したる人類の如きもまた極小の生物にも一の自制自治體を爲す者は即ち一の自我である。自我は己が掌る處の分を守る。他との混亂をさけて自發的自制自治自造の性を有てをる。いかに微小なる生物も能く自營を爲し生殖を爲すものは個々の小我である。自己を保存せんと欲する性能あり即自家を治んとする衝動である。また自家を分身して保存せんと欲する氣を有す。即ち生殖を有する所以である。自己保存の道として飽迄營養分を捉へんと欲すると共に、又自己を食はんとする自己より大なる我の餌と爲らんことを恐れて、之には全力を盡して防禦して居る。是が生物の衝動から發達して、人類の如き高等なる精神生活を營む生物に至りても、此の動物欲は有つてをる。否還りて主我的と爲つて、此の生の欲が發達して、貪瞋痴慢等の煩惱として、一切罪惡の根本とまで云はるゝに至つた。之の自制自治の我なるものを佛教にて末那と名く。即ち主我の義である。即ち我痴、我見、我慢、我愛の主體である。

植物の如き又動物の發生階級に在る胎兒の如きは、嚮動的の狀態にて自活す。夫より發達して小兒と爲りて、衝動的に自營性を爲してをる。進んで人類に至るも天性我は動物と同じく唯動物性の自體生活を營むに過ぎぬ。次に進んで理性我となりて人類特殊の主我は意識的と爲り貪瞋痴慢疑等の我欲の惡をも發達すると共に、自我は理性自覺として人類社會を組織して、相互の間に權利と義務を規定して、政治又は仁義五常道德的社會を組織するには必要缺ぐべからざる精神の作用と爲るに至れり。

八 理性我

人類は地上に於て最進歩したる生物である。殊に精神生活に於て最能く發達してをる。人類の精神の高く他動物に超えたる物の中殊に理性に於て著し。宇宙には一切萬物の根底に横る理性存す。萬物は天則秩序の理性に律せられて生成す。宇宙が萬物を構成する處の理性と吾人腦裡に感覺せられたる理性とは同一の根底より受けてをる。

理性は萬有に貫くものなれば自己の理性と他人の理性とは同一本性の差別的現象なれば、本來一體の個々現である。故に萬物内存の普遍的理性が吾人の腦中に在りて高等なる心理作用の理性智として活動する。吾人の理性は能く自然の理法を判断し觀察し得る心の働にて、若し人にして理性備はらざるものなれば、秩序を整理したりまた自然萬物の中に存在する理を知ること能はざるべし。萬物には一として自然理法の存せざるは無い。即ち物理の理の如き植物や動物の生理の如きの理法を知り得らるゝものは吾人の理性の働きである。理性我なるものは法律上の自家の權利義務を能く理解し、己が分を守り又他を侵害することなく正義を全うし、また仁慈博愛他に及ぼし、自の苦より推して他人の苦を恕し同情する如き、高等なる心の働きは理性から感情に及ぼす心の作用である。また正見を以て自己の行爲を照して正道ならしむる如きは、理性我にして能くする處である。此理性は人の統率的心理にして自家を統一して自制自律自治せしむる主體なれば、法律にも道德にも此の理性自覺の光を以て仁義禮智の人道

的行爲を爲すことを得。

理性自覺の我は人格の中心としてすべてを御して人道を履行するもの、人格具備したるものとす。此理性我は一方には認識理性として自然科学の範圍なる物理や化學等のすべての理法を知り得る智にて、一方には實行理性として法律及び道德上の自己を制して倫理上の完全なる働きを作すべき理性である。理性我にして完全なる人格具備するものとす。

人が理性我の完全なる精神生活を得るに至るは法身の範圍にして、之を宗教的に云はゞ法身のミオヤの聖意に契ふ人なりとす。理性を超越して絶對なる如來の靈光の下に入るは、報身の光明即ち平等性智の光明を被むりて、永恒の生命とし圓滿なる人格即ち自覺覺他覺行圓滿の佛と爲らんには、報身平等性智の光明を仰がざるべからず。

平等性智

平等性智は報身佛の大智慧遍照法界の智慧にて、世界因縁に約束せられて有限なる吾我を執する末那識は是れ衆生が我見我愛等の惑を以て業を作り生死の苦を受くる主人公である。此の末那の吾我を執する惑を解脱して、吾我の性が轉化して大智の光明顯現する時は、平等性智の光明となりて、自己の本然清淨の自性天真が現れ来る。之を唯識では凡夫の末那が轉じて平等性智と成るとは是である。

平等性智は一大心靈の自性清淨の性智の光明にして、自然に照す智慧である。之れ本覺の智慧光明である。諸佛最正覺を成ずとは、實を云はゞ、菩薩無量却の修行の最終に菩提樹下に於て正覺を成ずる時は始めて覺るものゝ、本覺の光明が正に明かに顯はれたることである。喩へば朝に寢より起きて見れば日光が普く天地を照してをる。本覺彌陀の光明は日光の如く、始覺の佛は寤めたる人の如くである。本覺平等性の光は永しへに照せども、未だ覺めざる人は知見すること能はず。是れ諸佛正覺を成ずる時、一切智が師が無くも自然に知らるゝは此の彌陀の本然の智が始めて成佛する心に

現はれ來るのである。

前の大圓鏡智は心の相にて平等性智は心の性である。

報佛平等性智の光は普ねく照せども、一切衆生が無明と因果の世界性の衆生性の人我と法我の爲めに約束せられて、迷の我性生死を脱すること能はず。始めに人我を脱するは因果無人を悟る。即ち今自己を能く理解すれば、種々の因縁に規定せられたる我に實の我を認むることはできぬ。此の形とても種々の元素の聚合體に統一自治體をなしてをるものを假りに我と名けたるものにて、元來の我は不可得である。引きよせて結べば柴の庵なり解くれば本の野原なりけりである。

法身の一大理性より發展せられて世界の因縁性と展し、世界の因縁性より衆生性と産出せられた。原始的微小の無意識的生物より起りて漸次に進化し、遂に人類の如き意識的動物に進み、意識我となり理性我と進みては、世界の因縁因果に規定せられたる我である。

三性の内、衆生性は世界の種々の因縁に約束せられて成立た個性を全く自我と執して、我見我慢我愛の性を以て、我なる者は一定に固定せる我ありと認めて居る。之を分別起性と名づく。全く固定せる我實在すと計度するは實は迷である。之の迷ふて我と謂ふのを人我とす。

理性が開けて世界の因縁の理法が明かに爲りて見れば、元來此身心は種々の因縁に規定せられて成立たる一の統制の自治體に過ぎぬ。宇宙法爾の理法因縁の理法は確かに在ると認めて因縁我在りと計するを法我と名づく。此の法我を計度するは固定的個性を計度するよりは自我を能く明むるものなれども、未だ自我の根底を自覺したもので無い。

本より衆生の本性は人間と云ふ固定性でも畜生なる實性でもなく、一大理性を本として而して世界の因縁に規定せられて人間若しくは他の動物の性と爲りしが即ち末那識である。此理を諦かに自覺して因果の上に成立つた我はあるけれども、實性の我は

無いと認むるが人空若しくは人無我と云ふ。人我より解脱したのである。更に進んで因縁法我をも超越して自性清淨の靈智現前した時は、如來本覺の平等性智と冥合した處、之を始覺の平等性智と名づく。即諸佛最正覺を成する時の一切智無師自然智の現じた處である。前の大圓鏡智は心の相にて此性智は心の性である。

諸佛の平等性智

本より彌陀の一大性智は、本然なる一切を統一攝理の智ともまた本覺の智光とも名づけて、本より法界に遍照せる性智である。諸佛正覺を成する時に始覺が本覺と合するのである。

宇宙の自性に徹底的に大悟する時は、自性本然の平等性智現前す。然るに自然と因縁とに規定せられたる我は生理に縛られ因縁に約束せられて自由を得ぬ。天性我を脱して理性的自覺の我は、人間としては法律にも道德にも權利と義務とを尊重し、自己

の天職を自覺することなれば、世界の上には是なるも、然れども自然に約束せられて未だ絶對的の自在を得ると云ふべからず。若し自性の根底なる如來性智と合する時は、自性我にて大自在である即ち是れ大我大自覺である。平等性智は本然自性の光にて、十方三世一切世界及び衆生性を超越したる絶對の理性にして、而も其の大自性中に十方三世一切の世界及び衆生を統攝して、一切の自性の根底と爲つてをる。此の自性清淨を自覺して、全く彌陀の大我の中の我として、此の自性の光の下に、理性を以て自己の職を爲すは最も高等なるものである。

佛教の諸主義

前の大圓鏡智は一大觀念態にして、一大心靈の相象として、天台の三觀、唯識の眞如觀等は、此方面に相當するものなることは已に明しぬ。而して斯平等性智は性宗と云ふ三論の八不中道の如きは八不中道觀と云ふものゝ、其の性質から云は、眞如の

自性を見る主義なれば、凡夫及外道の迷執と妄見を破せば八不中正の眞性は自ら顯示するので、般若皆空を以て一切を否定す。凡夫の五蘊より乃至佛の一切種智に至る迄も悉く否定す。有ゆる迷情を拂ふて而して後本然の自性のみ在て顯現すと。此主義は觀念を用うるよりは寧ろ一切觀念をも破つて破り破れる者は悉く破し、自然に破れざるものの自性のみ顯明す。禪家は觀念を用ゐず直ちに人心を指して自性清淨本覺無漏聖智實在することを發見す。直ちに一切を破つて自性を發見すると、空假中等の法に向ふに置いて觀念するのは大に趣を殊にす。性宗般若禪那宗等は是性智の方面より悟入するものとす。

(以上の平等性智は「彌陀教義」)

平等性智

頌に曰く

絶對平等の自性より 人と世界と神性の

偏依圓の三性は 一如の海の波浪なり

宇宙萬法は平等理性の理より發展し、種々萬差の性となり、また平等の性に歸するものとす。一切色心依正の萬法は悉く其性を異にす。然れ共此根底は平等性なり。

性智は宇宙心の自性、世界及び一切個々の内性なりとす。

性智を人の心理に比例せば、理性に相當すべし。また人の内性自我又は自覺に比すべし。是れ法界自性。

平等性とは差別性に反對する理性なり。然れば宇宙には相對差別の萬法と其根底統一なる平等性あることを忘るべからず。差別と平等との三性を分別し法身の平等なる

ことを明さん。

三 性——一、偏執性

三性とは唯識論等によりて名を藉るに、一、偏執性また分別性、二、依他起性、三、圓成實性、にして初の二性は自然萬物及び一切個々の性、後の實性は宇宙の本體即ち如來の自性なり。今初の分別性を個性又は人性と名づく。一切の個々動植物及び萬物は各々特殊的に性をなせり。唯識論に偏計所執性とは、各人は此因縁所成の我なるを識らず、此衆和合の上に特別に我なる主宰者あるかの如く分別し計度す。其實は全く我なるもの有るにあらず。之を實我と執するのは謬なりとす。

依他起性とは、すべての個人は、實に我なるもの特殊的に實在するに非ずして、此身は四大の依りて集れるもの、斯心は四蘊の依り集れるものなれば、相對に規定せられて成ずるものなれば、依他起性となす。

圓成實性とは、因縁相倚つて成立する萬物の絶對的根底なかるべからず、即ち圓成實性は是れなり。此實性は宇宙の本體、因縁によりて成りたるものに非ず。本然自爾の性徳圓かに萬徳を具備して缺少する處なし、故に圓成實性と云ふ。

偏執性を個體性また人性と曰ふ。小にして自治體をなす。一切の有機、若くは動物或は植物一々各々自治體を成して個性を構成せり。小自治體をなす所の個々には其性を構成す。極めて微小なる動物の如きは數多の數を聚めて檢する時は同一の如くに思はるゝも、其内性に於ては特殊的ならざるべからず。平等の理より天則が自然界を發展せんには平等に近き者より益々差別の方に向て發達す。故に劣等なる生物よりは益々高等なる生物に進むに隨て各自の特殊的性質を顯著にす。此高等なる性ある個人を我と云ひ、此我を構成する所の資質の調劑同一ならざるが故に、各個人は其性質を殊にす。世界數十億の人類中一として形氣の資性特殊的ならざるはなかるべし。此人の内性の特殊的なるは其面の異なる如く同一なるはなし。近來犯罪人の拇印を徵査する

に人の指尖の紋理が各曲異様にして彼此相似たるもの六百四十億の中僅かに一。一々の指の紋理に於てすら是の如し。複雑なる因縁より成立する所の形氣の性質に至つては、一切悉く特別なりと云はざるべからず。

生物を構成する有機が種々の關係によりて一切の個々を特別の性となす。之を機制我とす。此機制我は相互に自他を角立し彼我を計度す。

人類より已下の動物は未だ意識的に入らざれども、各自が特殊の性を存すること否定すべからず。彼等は未だ發達せざる人類なればなり。人と同じく我的形式が伏在するものと云はざるべからず。

また小にして自治體をなすものを個體とすれば、個人は個人としての自治體を成し、其より小なる自治體を統轄す。

人の身體の中に眼は眼として自治體をなし、五官四支五臟六腑悉く自治體を成して、其よりは小なる自治體を支配す。人體を組織する細胞は實に小なり。然れども一々細

胞は各小自治體をなせり。悉く其個性を成せり。而して此中にまた千萬年に變せざる遺傳性まで有せり。此が生命の單位、性質の單位なり。斯る微細なる細胞に、遺傳せる性を有し之を聚めて個性を構成す。

然ればいかに微少なる生物と雖も生命の單位なり。微細なる細胞數多より組織せられたる生命なれば、また其形氣の質焉んぞ殊ならざるを得ん。

人類よりは迥かに原始の生物に遡る時は、其内の生活の構造が甚だ單純なれば、其内性に於ても隨つて單純なり。其單純なるものほど其内性が自然的平等に近し。生物よりは尙ほ有機性の元料たる無機物に至ては彌々自然的平等に近しと云ふべし。自然現存の内性は平等性なり。

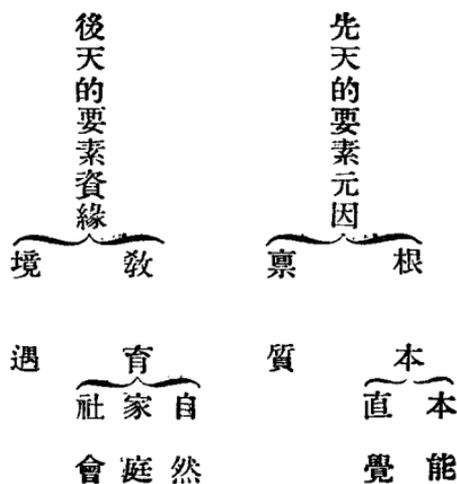
自然平等性より乃至原始生物を發生し、幾千萬の階級を経て人類に進み、益々其が特殊的の内性を著しくし、個々の我執も發達し、意識的に我見をなす。

人性の種々

個人性は我なるものは因縁和合の聚合たるを識らずして、實我と計度するは、是我の原理を知らざる凡夫の妄執なりとは、唯識家の主唱する處なり。然り而してまた研究すべき價值あるものは、個人的特殊性なり。生理學心理學上より研究すべき身體を構成すべき物質の細胞の内的生活性質に於ては種々に殊れる所なかるべからず。生理學心理學者は人體を構成する骨格等に縁つて其性質を推察す。是れ個人性を構成する因なり。

人の内性たる我となる肉體の形氣の稟質に就ても種々に分つ。希臘のカーレンは人の氣質を四種に分つ。一、多血質、血液循環が潑々快活にて熱し易し。二、膽汁質、筋肉よく發達し威嚴あり。三、粘液質、精神鈍にして忍耐強し。四、神經質、頭大きく體瘦せ神經敏捷なり、等と大別す。四質相互錯綜混合してまた種々に分つべし。

個人の性質を構成する因縁は、



先天的元因は父母の遺傳。内に、根本的本能は自然生理衝動、飢て食を求め渴して水を需むる如き、直覺とは人の善惡等自然に判斷する性を有す、また肉體物質的の稟質、即ち人の氣質を四種に分つが如し。

後天には周圍の事情社會と家庭教育によりて特殊的性を成立す。

後天には四圍の境遇に規定せらる。地勢にも關係す。例へば山岳の人は獨立的勇氣に富み偏狹に傾き易く、平坦の地に栖む人は快活にして自治の精神に乏し。邊土の人は質朴にして都會に育つ人は輕薄に流れ易く、また家庭と社會と學校等の教育の事情は人の性質を種々に變せしむ。

家庭には軍人と商家農家と官吏等の如し。大に氣風に影響を及ぼす。また太平の時代、戰國時代等の境遇にも個性を殊にす。また各其國風は自ら個人性に及ぼす影響。

個人性に付ては定命論あり。自然に天運循環して其人の生年月等によりて其氣質を天に稟くと。また天元十二宮十干等天運が人の運命を來たすと。

何れにしても個人性の種々に分るゝ所以のものは、元因と資縁の世界的相待即ち因縁に規定せられたることは確實なり。

個人の性先天的本能と直覺に對しては、宗教の與ふる所は之を開發して如來の平等性智に契はしめ、即ち眞理の光明をうるなり。形氣の質には、自然に其稟けたる偏僻

を免れざるが故に、之を淘汰し靈化するにあり。後天の境遇によりて薫染したる惡習を一洗し正善に鍛練するにあり。

斯く個人性質は千差萬別にして各特殊のなり。然れ共これを規定するには因縁を待たざるべからず。之を依他起性と名づく。

一、依他起性

依他起性とはまた因縁性とも云ひ、世界自然に有する所の性能にて、世界萬物は是非とも因縁の約束を離れて成立するものなく、因は獨り成らず必ず縁を待つ、例へば地球の萬物は太陽の縁力によらざれば生成すること能はざるが如し。陰陽二氣相依つて雌雄相交ひて生成するが如し。

物の引力

因縁相和し物を成す。萬物が因縁をなす所以は、物には必ず内面に人の理性の如き

性能を有すればなり。

物に引力あるは物々皆内性の自己に因縁を求めて合せんとする理性存せり。若し物に自動の力あるを否定せば引力の依りて出る所を認むる能はざるべし。

物分子の因縁がすべての分子は相互に自己に引力の理性ありて自ら愛するものと抱合し、又縁盡る時は則ち去つて、また他の愛する分子と抱合す。化學の元素に於ても元素相互の因縁力ありて、因縁相應するものは合し、否なれば離散す。酸素の一と水素の二を接着せしむれば兩性相應するが故に抱合す。またニトロリリセリンの如きは此親和力に對して離間を性とする窒素の作用なり。彼は因縁相應せざるが故に離散す。物質に愛憎の念ありとヘツケルが解したるも、物質の内性は人の愛憎の如き理性ある如くに謂ひて、相愛するものは因縁相依りて抱合す。

依他起性の横豎

世界萬物は他に依りて起る。萬法が横に空間的に相依りて成すを因縁と云ひ、豎に

時間的に相依るを因果と云ふ。

見よ宇宙の無限なる、天體の無數なる、因縁相依つて網の如くに、星宿相ひ連絡し、成住壞空、成じてはまた壞し、元因には必ず結果あり、因果貫連して永劫に窮りなし。

生物の連絡

人生の因縁の連絡は原始の人類より——物心相互の關係——萬物の條然たる秩序——因縁因果

天體地界動植物に條理あり秩序あり。また一滴の水一點の塵にも分子の抱合して散せず。

時間的にも萬物が一念一刻の少時間より、千萬年永劫に一切の生物が生滅起伏し、無機物も其状態が種々に變轉して止まず。空間的に緯を成し、時間的に經を成したる萬物が變轉極りなき中に、之を統一し攝理する所の理性なかるべからず。

因縁

四



因緣の中、

俱有因士用果。——俱有は同時の因果。空間的に因果、甲乙同時に相ひ待つて成立す。天文學の太陽と地球相互の引力、植物學の植物は動物との相依相互の關係にて同時の因果法なり。

同類因等流果。——時間的に前後繼續して絶えず異時の因果法なり。因果の萬物が生滅轉變するは火炎の如く、萬有は念々に生滅して、自己の一定の法則を守りて、人

間の血肉骨等、前後新陳代謝しながら、自己の定性を失はず、無終に生滅變化の中に、各々自性を守るは、化學の元素の變化しながらも各々自性を守るが如し。同類因に依つて等流果を得る。

相應因土用果。——心に屬する因果法にして、前の俱有因に由て土用果を得る物に關する分を除き心理にのみ關係する因果法なり。心法の四十六種其心つ作用は必ず時間を別にして起るにあらず。花を視るに、能縁の心が所縁の境に接觸し、又幾分の警覺（作意）をなし、又快感不快（受）、青か白か（想像）思惟觀察（思）因縁相應して菊花等の認識を生ず。

遍行因等流果。——前の同類因と寛狹の別なり。貪瞋等の（十）見此の煩惱は四諦の中に遍行する故に、

異熟因異熟果。——異熟とは果に就ての語、異熟の果を呈する原因の故に、善惡無記に於て、因は善或は惡にして、果は無記。善惡の業に依て未來異熟の果を生ず。業

因に二種、引業と滿業。

増上縁の中、

能作因増上果。——一の結果に、全宇宙の萬有悉く其原因なり。直接親密強勝的に勢力を與ふるもの、俱有等の五種因果法と、第二間接弱勢的に資くる與力増上の能作因、及び第三類に直接に勢力を與へず間接にも（中絶）

眞性の妙用因縁によりて變易す。眞理の靈能之を性徳と云ひ、因縁によりて萬有に現象す。因縁を離れて萬有と現する能はず。實性隨縁々々實性。原因あれば必ず結果あり。之を物理に例せば實性は物分子の如く、因縁成立の萬象は恰も事物の如し。分子が因縁によりて事物となり、事物となりても分子は其質を變せず。性徳萬物に現象すとも改變なし。

隨縁變易の萬物に、因果の關係法則嚴然として、古今改轉する事なきは、本不變の

實性之を統ぶればなり。

因縁因果の成す萬物の裏面に有する理性、

緣起法界 理實因果 不思議

釋迦大悟の眞理上に現象せる因果緣起の眞況を説明するに、心界の現象も因果法則によりて動き、物界の現象も亦然り。

三、圓成實性 神性

圓成實性は前偏依二性の根底、一切の人性と相待規定の世界性とは此實性を離れて體あることなし。世界萬物は因縁の關係を離れて成るることあるべからず。之が統一的根底たるは實性なり。實性は因縁によりて成れるに非ず。故に相待を超えて絶對また他に規定せらるゝものに非ず。同一の本體圓滿にして缺くる所なく本然自爾。造作を離る、故に成と云ふ。平等永恒眞實の理性なれば實性と云ふ。實性は絶對無規定

一切差別を離れたる故に平等と云ふ。實性は時間空間及び一切差別を絶し萬物の自性。平等の實性は一切萬物の自性にして、若し此實性なからんか世界萬物あることなし。

理 性

平等性智は人の精神の理性に相比すべきもの、平等の性智が一切に内性として存すればこそ、自然律として天則、自然に秩序が整束す。然れば宇宙間一切萬物の生成活動の中に一として秩序の整はざるなし。萬物は平等性の内存にして之を離れたるもの、在ることなし。本性は大自由なり、一切を自己より發す。

實性の自發は外面よりは因果の理法として觀せらる。萬物は生成には必ず因果的に現はる。内觀すれば性智が自由の發現なり。平等性が發現して因果律となりまた一切個々差別の自性と現はる。

絶對同時態、平等一如の理性の一切差別萬有の性なり。一如平等の性と云ふも、無爲恬憺超然單獨の謂にあらず。一切萬有の中に存在して自由發動す。

平等一如の本質に一切萬有の性徳を含藏して遺すことなし。例へば凡そ複雑極りなきもの人の腦髓の構造に及ぶものあらざるべし。腦髓には一切の記憶、心象、感情、智力、意志性格等の一切活動を包括して遺すことなし。然れども腦はまた本來無一物にして一如平等たり。平等にして一切の差別を總括す。宇宙全體の圓成性の一分子たる個人の腦髓も亦た然り。一切差別を包括して平等なり。況や一切の淵源たる、一切を包括せる宇宙心の圓成性に於てをや。

密家に、性智を、因には虚空藏に配し、果には寶生如來を以てす。虚空藏は虚空に一切萬有を包藏するが如く、性徳無盡を具備して餘りなし。果分には本有に具備せる性徳の修得顯現の一切智を寶生如來と云ふ。また寶生如來を三界の主と名づくるは即ち大我の義なり。大日を大我とするは總稱にして理性を大我と云ふは別の名なり。

圓成實性とは學語にて大日大我また寶生如來等は是れ宗教の表號なり。

宇宙内存の心王如來の理性が一切萬有に内在して、一方には天則秩序として、自發的に萬物を産出せしむるに、論理的規律に隨て建設す。若し人に理性なからんかすべての秩序を整頓するの能なし。平等性は萬有の内的理性なれば、自然の造作は一として秩序をなさざるなく、條理なきなし。自然界の内性自發的の勢力より産出せる萬物を外部より見れば因果律的に現はる。之を依他起性と云ふ。因縁依他の根底は平等性にあり。依他起性の因縁を藉りて成立したる個人性は即ち吾人なり。此偏執的の吾人も本圓成性をもて自性とすれども、偏計の肉我の凡質に覆はれて、自性天真の光を失ふ。終局目的の心靈界に向ひて、如來の性智に歸する時は一如に會す。

平等即ち差別

例へば物理的に平等の眞理は分子の如く依他の差別は事々物々の如し。事物は變化起伏休むことなきも、分子は千萬年を経ても其自性を變ずることなし。平等の理性は依他の因縁によりて、十界依正乃至無盡の一切に變現すとも、平等の理性は常然とし

て不變なり。因縁に依つて十界三千乃至塵數の萬象を現す。

差別の平等

自發自動

頤に曰く、平等性を根底としては、無盡の差別を發生し、

凡そ一切差別の萬物は全一の理性を根底とし、即ち圓成實性が自發自動的に發生せる萬物が、表面には因縁相依り因果連綿して、種々に變現するも、内面は平等理性なりとす。

萬物は平等性一元

元動植物の一元——動物と植物とは、高等に發達したる松柏と牛馬との如くに至ては其差別の懸隔甚しきも、其原始に遡る時は無差別の平等なりと云ふべし。動植物何れも其原始は一のアメンバの微粒が水中に游泳しゐたり。是れ植物にも動物にも別か

れずして動植何れにも成りうべき生物なりき。最下級なる微粒に至つてはモネラの如きプロハイオンの如き生物にも無生物にも決し難きなり。

即ち其原始は地球が冷却したる時、太陽の光線と電氣の或部分の因縁力によりて一種の生物的組織をなし、これを原形質と云ふ。即ち炭酸水窒の化合物なり。此四元素は是れ物質なり。此物質に自然生命ありて、この微粒より發達し進化して、下等なる動植物より竟に進んで高等なる動物に化したるものなりと。

化學の元素も今日は七八十の元素ありと云はる。其元素にもまた其元素たるべきものあるべし。即ち炭、酸、水、窒の如き、また此四元素にも其元々素は單純平等の元素よりも其因縁の結果として種々の元素となりし如しとは、専門學者の説なり。之に由つて之を見れば平等の一元より因縁によりて數多の元素と化したるしを知る。

曰く、一大元素は平等同一なるも其中に唯だ因縁相應して接近するものと、因縁相應せずして離間する部とあり。相應する部分は相ひ接し相ひ聚つて力の起點を生ず、

是れ即ち極微分子なり。此分子の因縁力は益加はれば元素となり物質となる。相應せざる部分は相應せる物力の爲に緊張せられて反抗の力を生じ、相應せるものは彌和合して重厚となり、相應せざるものは益稀薄となる。物質は重厚の極にして、宇宙平等の消極力を集めて陰動し、稀薄の極は即ち精氣にして、平等の精極力を合し、物質に對して陽動す。宇宙一切の現象界は物質と精氣の因縁合散の關係より成りしものと云はる。萬物は根本平等の一元にして因縁力の爲に變化す。此萬物は表面より見れば因縁力因果律に生滅變易するものの、其萬物の内面に、一切有機物は自己の内性より自發的に生成す。例へば稻の種子は土地と潤熱等の縁力によらざれば萌發せざるなり。然れども外部より其助縁を與ふるとも自己に自發すべき性能なからんかいかでか萌發すべきものぞ。一切の動植物が生成化育の理は同じく自發的自治的なるはこれが原理なかるべからず。即ち一切萬物の根底自性が平等の一元性に基源するものと言ふべし。

物質の内性

物質皆な活けりとは、植物の如き地下に根を張り空中に蔓をはびこり自ら動き自ら活けり。また營養分を自ら吸集し其生活的形式の働き動物と異なることなし。

一切萬物は外面より見れば物質にして、内面より自觀すれば精神なり。此生命心力の内的生活を性と云ふ。然れば一切萬物の内的生活の皆な差別の性をなすも其根底に至ては平等の一性なりと云はざるべからず。

物質内性即ち理性なれば、物質向上せば即ち生物となる。是れ内性によればなり。すべての生物は皆個性、人はいかに進歩すとも平等の自性を離れて生物を造ること能はず。人力を以て炭水等を以て原形質を造り乃至生物を造ること能はず。其原形質なる者は前代の形質より生ず。然らば其原形質も地球の太初すべての生物なかりき。然れば何れより發生したりしや。そは地球の冷却したる或程度に於て自然に發生したるは地球の内性平等性たればなり。

平等性は宇宙總體の内性なり。全一の理性を根底として、此に性智が世界に萬物を

自發せしむるには内より發す。

外面には因縁因果の關係と現はる。平等全一の力能く萬物を制す。常に生物を向上せしむ。また原形質を造り生命を造る。宇宙全體の内性が即ち造化なり。宇宙は絶大の設備絶大の構造、永久自動の働きは獨り平等性のみ能くす。

宇宙は全一の理性なり。一切の局部たる差別の個々は、絶對的に獨立の自性を有せず。個々は平等全一を自性として其相待的差別の一員なり。宇宙は絶對の理性にして萬有は一理性の變性なり。

二、平等性は質礙及び意識の二性の下に差別性に發展す。

三、平等性因縁の作用は、平等性が、自己を差別の調和的變態に發展する自性にして、目的論的必然の現象なりとす。

絶對理性は自由にして理性なれば、論理的に必然性をもて自己の本質を發展す。平等性は内面より自發的の調和を保つ。全體としての萬有は外部の制裁をうけず。

平等性の必然的理性は平等より差別に發展するは向上の目的あればなり。

平等より差別に發展す

宇宙の内性は平等にして、理性は萬有の内性にして全一性を萬有の根底として、萬物を向上發達せしむ。平等全一より差別に向つて發展すとの理は萬有が自己に其性能を伏藏せり。生物進化の理について考ふるも、原始動物の原形質に已に種々の階級に向上すべき性能を伏藏すと言ふも不可なからん。生物生命の内性に人類に成りうべき伏能を有したるものと云はざるべからず。

一體より差別。原始生物の微粒に獨一的統一の體系をなす故に、極小の生命は、汎神論に、極大の個體なり。極大が大造化の如く極小も小造化なり。極小の生物に内性が一微粒の原形質炭酸の化合物の一個が分れて二個となり、また分殖し乃至雌雄兩性を分つに至ては合體してまた分殖す。最微小なる生物の原形質より分殖し應化し種々

に變易し遺傳し自然淘汰の理に進化せられて單細胞、水母形、脊椎乃至人類に至る。

前の原形質より分れて、ついに因縁相ひ依りて、一體より分れて、時間的に子々孫孫に相續し、空間的には分殖分派して、世界全面に蔓延す。一切の生物生命は本一體より、廣く世界に分布し長く連綿として斷ゆることなし。

生物進化

世界萬物は自己に生命となるべき性能を有するは内面に平等全一の理性を有すればなり。世界に於て生物の生命は物質的化學的外面上よりの研究によれば曰く、生物生命は炭酸水窒の化合物の原形質に酸化と彈撥力あり。酸化は生活力の元氣、彈撥は發動の元、また消化と分殖作用起る。消化は營養をもて自己を保存し、分殖は種族を保存す。

此二作用は生物を向上せしむる機能なり。

進化に五則あり。一、生存競争の努力。二、變易、身體組織の物質が自然に變易し之に因つて種類を生ず。三、應化、身體が外界の縁に感應す。四、遺傳其形質を遺す。

内性伏藏

全一なる内性の分たる個人の内性なれば、一體の理性より差別の萬性が發展せりと云はゞ、種性の淵源は如何。

平等の神性は絶對一如。一如は無定性。無定性とは一性、一性は消極の無性にあらずして無性は性として性ならざるはなき積極的平等性なり。平等無定性の一理より一切差別の萬性を開展す。

一如の理性に無盡の性徳を具備し、一切智の理性によりてよく秩序を整束して萬物を産出す。

統一攝理

相制の統一性——一切の差別は平等性——内面より自發的の調和を保つ

宇宙萬有が相互の關係に就いては、萬物を統一する理性の存在することを承認せらるべし。視よ天體の星宿は空間的には一の太陽系に數多の屬星を率ひ、相互に關連し、各恒星は尙ほ大なる聯絡をもて因縁を成し、帝網の如くに、空間に繋れ、地上の萬物が相互に相ひ制し因縁相係つて散在せり。また時間的には、一切の星辰が成じてはまた壞し、壞してはまた成じ、成住壞空、因果的關係をもて展轉して貫連す。世界の萬物大小となく擾々紛々たる、これらを外部より瞻望する時は相互の何の關係もなき如くに見ゆるも、其内性に於て不可離の關聯をなすは、相待關係の裏面に平等性に統一攝理せられたり。

人類及び生物の内性の連絡

地上萬物中に就いて、有機物が因縁相ひ依りて成立し、因果相ひ係りて相續す。夫婦相ひ縁り、親子の因果祖先よりして累代に分布し、世界に彌蔓し、人類の原始より

現代に至るまで、親の精核が子に結び、千萬代を通じて一系連綿たり。萬國に亘りて繁茂せり。寔に是れ一莖の枝條に外ならず。

獨り人類にのみならず、生物原始の源より人類に至るまでの生物生命の血脈は系統連綿たり。吾人が肉的生命の脈絡を操りて萬々代の祖先に遡る時は劣等なる生物たるや疑ふべからず。

空間に世界に擴布し時間は一切生物の階級を通じて内的生命の關係をなすには、また内性に於て平等の理性の存在は否定すべからず。

自發的調和 秩序の整束

自然界の萬物元體より一切生物に至るまで、宇宙間に現存する萬物の状態を見るに、いかに紛々擾々たるも、秩序の整然たらざるはなし。

宇宙の萬物に建設的衝合の行はるゝや、太陽系を見ても其調和のよく調ひたる、遠

心力と近心力の遊星の巡環するや、太陽を中心として公轉し、其秩序の整然たる規律の正しきこと永劫に違はず。天體の無數の星宿何れか其正規を逸するものぞ。地上の萬物何物か自然の律に關せざるものかある。

萬物一定せる規則の存することは平等理智に統べらるればなり。

唯物論者が自然の働を説明するに、萬物の生々活動は之を成立する物質の非理的分子が盲目的に聚合し偶然に發生したる結果なりと云ふが如きは、吾人は肯せざる所、萬物が自己より自發的に生成するに、論理的規律に隨て動くべき理性が存し、秩序の整束たるは、物自身が攝理するにあらずして、よりは高等なる理性によりて、統攝せられたるものと言はざるべからず。個々の生物各自全一の理性に繋がる限りに於て、各其自性を全うす。然れども平等全一の理性と連絡しうればなり。譬へば人の眼官は能く視覺ありて其眼の性あるも、若し人の身體を離れて其用をなす能はざる如く、宇宙は内性全一の平等性によりて、萬物各其性を全うし、能く調和し整束す。全一の平

等を離れ秩序なくして何ぞ能く成立すべけん。

小 大

宇宙内性は全一の理性に統べられ、平等性海を離れて差別の波浪あることなし。然れば即ち萬物一切の個々は平等全一の一分、分々悉く全一を代表し塑摸す。宇宙全一の理性が表顯せる一切の生物なれば、いかに微小なるものも獨立的自治體をなす。而して其よりは上に自治體系に統べらる。たとへば人體を組織する細胞は實に微細なるものなれども一々の細胞皆自治體をなす。人の眼耳等の五官より四肢五臟六腑一々の毛孔に至る迄各一體系をなす。各小體系は其上の統一的體系に支配せらる。人の眼球を組織する所の各細胞は各小自治體をなすも、分々を合して一の眼球統體系に統一せられ、眼球體系は人の身體に統制せられ、一切の個人は一國の自治體に統制せられ、一切の國體は一地球に統制せられ、一切の惑星は太陽系に統制せられ、一切の天體は

宇宙に統一せらる。宇宙全一の平等性は能く一切を統一し攝理す。

吾人が此個人體を統制する理性を自我と云ふ。また自覺とも云ふ。此自我は能く一切の精神活動及び身體一切を統制す。此自我の根底たる平等全一の理性を體達するを正覺を得たりとなす。若しこれに達する時は法界を全うして平等性智の光のみ。

性智自然界

吾人の心靈が性智たる如く、宇宙心靈は一大理性なり。

然れば即ち自然一切萬物が論理的規律に随つて四時の運行萬物の化育をなすに非ずや。數學にも重學力學等の眞理は自然界を通じて眞理なり。然らば理の數として推理することをうるは、いかに變態なる物にも應用して違ふことなし。全一は全體に於て永恆に動かすべからざる平等の理性を地體として、無量差別の紋を織りなす。宇宙自然の現象は平等性を地として、萬差の模様を採畫したる織衣なり。

生理に於ても物理一切の理法として一定の則ありて因果律に隨ふ。

性智は自然界の内性にして、天則秩序の理性として、自然律を規定す。而して性智自己は絶對無規定にして、自然界の方面には萬物をして時間空間に因果律に規定す。

一切小大となく秩序の整束せる條理の整然たるを性智とす。一切の個々小極も自發的の調和をなして大極の一分を代表す。之を統一し攝理するは全性智にて、一切分々には差別的の性智なり。一切の萬物内性の理性が外面の因縁となり、差別即ち平等理性一切萬物を統一し攝理す。

因縁因果の關係の法則嚴然として古今變轉することなく平等の理性に統べらるればなり。

終局目的としての性智

頌に曰く、内性向上の目的は、一切靈性を發展し、

平等圓性に歸せしめて、一大真我に會すにあり。

宇宙心の内性は自然界に向つては平等よりも先づ差別性に發展し、一切の生命内性を向上したる人類を頂點とし、即ち人性は差別の懸隔他に超て特殊性を顯著にす。差別の極に達したる人性を、尙ほ百尺竿頭に一步を進めて、終局目的としては、心靈界に向つて、差別よりは心靈平等性に進む。其終局には一切諸佛と同じく、心性平等の性海に會せしむ。

若し宇宙が世界の進行過程に向つて目的ありとせば、什麼が是目的なる。宇宙の無限なる微小の吾人の得て圖るべからず。然れども宇宙全一を小さく代表せる僅かなる一地球の上に見るも、其目的設計は意識的ならずして、自然に目的に適合する理性存する如くに信せらる。其目的はいかにと云ふに、先づ地球の發展は生命の現化を目的とし、生命の向上は意識の現化を目的とし、意識の進化は心靈の現化を目的とし、斯く世界は生命を向上せしめ心靈を實現し、心靈の開展は世界の目的なりとせば、斯く世界は生命を向上せしめ心靈を實現し、心

靈は宇宙の平等性智と一致す。終局の目的は宇宙の自性天真の光明とせしめんとするにありと信せざるをえず。

平等性より流出せる個々とすれば、生物原始より人類に至るまで、其原始に於て已に靈性具備せるものと言はざるべからず。故に一切悉有佛性と曰ふ。靈性顯現するは人類に至つて初めて現化するも原始に伏能す。伏藏したるもまだ現化せざるなり。喩へば人の小兒の不識的意志が漸々に發達して意識的となるは、外界より之を注入するにあらずして、小兒が自己本能に伏藏する意識を開發したる結果なるが如し。

自然現存及び地球より植物等は眠れる精神にして、人類に至つて初めて意識的に覺醒したるものと云ふべし。人類にても孩兒は人性意識まだ覺醒せざるなり。

人類が他の生物に比較して覺醒せりと云ふも之れ他の生物に比較しての相對の謂なり。絶對的覺醒は即ち妙覺果滿の曉を期す。

三世諸佛番々の出世は、宇宙の終局目的に、一切衆生の一大佛性を開發して、諸佛

平等性に會入せしめんが爲なり。

目的と方便

絶大なる設備を以て宇宙自然界を建設し、中に就いて現世界を設立せり。斯地球が最初太陽より分娩して熱の冷却したる或程度に於て、炭酸等の化合物たりし時微小の生物に靈性を伏藏し、而して生物の向上は寔に是れ内存の理性存すればなり。微小なる生物自己に唯原始の生物には生理衝動即ち營養生殖の自然の氣あるのみ。此生理衝動には苦樂相伴ひ、本能的に生活し、いかなる難に遇ふも只生命を保護し、これらの不斷の努力は漸次に向上し、最下等の生物より萬々億々の生が層一層階級を經過し、單細胞より複細胞、水母形脊椎と陸栖となり哺乳生物となりたり。つひに生物中の靈長たる人類と向上したるなり。若し外界の資縁によらざれば自ら生成し發達する能はざるは勿論なれども、自己に自發的自性を有するにあらざればまた向上しうる理なか

らん。

生物の生命、單細胞の生命は一個が二つに分れて分殖し、無核蟲が向上して有核細胞となり。有核細胞の生命は核にあり。核の外包は唯だ之を助くる爲のみ。生命は外包にあらず。核が分殖するは分れて一が二となる。肉體は外包にして生命たる核は分れて子となり、子々相續すと云ふも、生命たる核は一系の連綿たるなり。親より子に至りて外包は更迭す。肉體及び生命は心靈現化の爲に機關たるなり。此生命と肉體は心靈がうべき限り向上し、心靈の光明を得て、眞理の平等性智を體得せしめんが爲の方便なり。人類のすべての精神、智力、感情、意志に於ても。

此身體と精神とは共に相離るべからざる關係あり。然れども物質的身體よりは精神は高等なり。また肉體の發達は、心靈を完全に開展せしめんが爲の手段として貴重なり。人類がすべての生物に凌駕し獨り超越せるものは物質よりは精神的に進化の程度高きが故なり。同じ人類中に於て賢人聖人と稱せらるゝ者は身體よりは精神的に超絶

したる者と云ふべし。

精神的に向上の目的は自己の伏藏を啓發し其性を遂ぐるにあり。其性を遂ぐるとは吾人が天性の奥底は即ち平等性を根底となす。直指人心見性成佛是れなり。人は自然界に向つては平等より益差別に發展し、人類に至て身體及び精神の状態最も複雑となり、而も是れ差別をなすことも顯著なり。而して終局目的には心靈界に向つて平等性智に入つて平等性の調和をなす。

見性成佛とは一切衆生、生命一體、理智不二、向上の終局は自己の本性を顯示し、佛々平等に歸するにあり。此靈性を遂ぐるを目的とし身體物質的の生活は即ち其手段なり。

終 局

衆生の内的性は單純より複雑に進み、平等より差別に向ひ、人類中に於て益文明に進むに隨つて個人的資格を重んず。

差別的個性が完全に發達したる後個人性はいかに進むべきやとなれば、佛陀なる大聖の教ふる所によれば、向上の終局は、差別を超越したる真理の極、平等性智に歸入す。自然差別の方面には差別の程度高きを貴とび、心靈界に證入するには平等の大調和を尊ぶ。故に佛教が終局目的に向はしむるに、差別の我を固執し我見我愛に偏するを凡夫と云ひ、平等無我の眞理に契合するを聖者となす。

終局目的に歸趣するは、いかに理性を顯示すると云ふに、小乗教によれば、人性の我見差別の性を超絶し、平等無我の真空寂滅の眞理に證入す。是れ平等性の消極的方面と一致するにあり。若し唯識によれば、人の末那の分別我を轉じて、如來平等性に契合する時は佛々平等に歸す。禪門によれば、衆生の自性本來是佛にして元來煩惱なく無漏の聖慧自ら具足す。自性天真の佛は本より昧らからずと。

差別我と平等の眞我

大乘菩薩は初發心より佛果に至るまでに差別的な我性と平等の佛性との中に、人性を脱して靈性顯現するを目的となす。差別の人性と平等の靈性とを喩へば人性は月球の黑色なる、靈性は（如來性は）太陽の如し。如來の靈光顯示するに隨つて人性解脫す。月の新月より十五日夜に至るまで漸次に盈るが如く、菩薩が初發心より五十地位の階級あるは人性より靈性益顯示するに程度あり。菩薩八地より十地等覺に至り、十四日の月に例す。満月は是れ妙覺にして全く本覺の平等性智圓滿に顯はれたり。如來性智に歸して、如々の智、如々の理と相應し、一切妄想分別の夢醒め、相待差別の相を超えて自性天真の天朗かに本來清淨の心性即ち自性の光なるを悟る。

諸佛平等の慧性ビルシヤナ徧一切處大我即是れ眞我なり。純一無雜の神性は即ち圓成實性なり。圓成實性の光明は即ち大日の平等性智なり。全法界を身とし眞如を性とす。大我の光明即ち性智。小我分別の性と世界相待の我性とは大我平等性の一分派なり。若し一大眞我の海水なくして相待差別の波浪あることなし。

平等性智

絶對理性態

如來一切智慧態の一面なる理性的智態を平等性智と名づく。如理智なり。前の圓智は絶對觀念にして個人の心象には觀念また認識寫象として實現す。個人觀念が開發し大觀念と相應して宗教意識は觀念的に絶對依屬の地を得たりき。性智は絶對理性にして、個人の理性の實現し、個人の生理機能の精神活動たる執意及び感情自覺等の生理的着色となる。此各々世界の各自己を執する生理機制より着色せられたる執意感懐自覺等を超えたる一大自覺また一大眞我は絶對理性態なり。

絶對理性を根底とするに拘らず、天則理性の相待規定の世界には、物心二體となりて、物性にも心性にも性質は種々無量に變易し、本同一理性の根底なるも相待的現象

の萬物には千差萬別の性質を現はすに至る。宇宙萬類變易し分類し分れたる各自は、同一性の中に變易の傾きありて全く同一なるに非らず。こゝに於て分別の心を起し彼我を執し愛憎好惡の情を起す。

天則は同一理性より物心二性となり。天則によりて種々無量に分類し、此分類の中に變易し、大にしては天體の星宿より小にしては地球の物々は、變易の故に彼我の心を起し愛憎となる。空間的には萬類一として同一の性相なるものなきが如く、性質に於ても相ひ同じからず。故に彼我の分別あり。時間的に云へば、昨日の我と今日の我とは同一形式の中に内容が變易し、生滅轉變に規定せられて一定不動の安立を得ること能はず。相待規定なるものは彼我は相互に制限せられて無限の理想に障礙を與へ、生滅轉變の規定は時々動轉して不變の理性の眞を沒す。こゝに於て生滅變易の中に常住の樂地なく、苦毒の浪を起す。相待的に彼我分別の執着より平等の理性に順はず、自他利害の心を起して罪惡を造るに至る。相待分別の性を脱せざるに非ざるよりは苦

惱と罪惡の状態より解脱するによしなし。相待彼我分別の性情より脱するには、絶對理性の平等性即ち絶對理性の一大眞我に超入して絶對的に空間に相待規定を越え時間生滅の規定を越え永恒不變の不動の性地を得ん。

前の圓智に證入しては自觀と一大自觀と合一し、觀念的に絶對依屬の相象を得たるも、未だ待比的に彼我の性情あり。時間的に自己が性情變轉す。今、性智光によりて絶對平等性の地を得たり。主我執意より解脱し、一切の物と心と主觀と客觀とは本平等性にして、無限空間を盡して平等に、無限の時間を盡して平等に、變易なく、善惡迷悟凡聖淨穢生滅等の一切の相待規定を超絶し、平等湛然の理性妄想分別の波浪なく、眞實理性の天霽れて自性天真の月さやかなり。これを如來平等性智態となす。絶對理性が如何にして相待分別の性質を作るか。また相待分別の性情を脱して如何にして絶對平等性に歸趣することを得ん。

初めに全一平等性、二相待分別の性、三分別即平等の理。

全一平等性

宇宙全一の絶対理性は本來已來心性平等にして、彼我の性あることなし。物心二質、生佛二性、其根底は平等理性なり。

主觀と客觀界とは其根底は平等理性にして、分別の性なるに、外界と内界とは現象にては異なるも、根底にては一致す。自己の經驗によるも人は外觀には物質なるも自ら内觀すれば心性なり。他の内面は外より知ること能はざるも自己の内觀の推論によりて他の内面を知るの外に由なし。一切は同一形によりて生活するが故に同一理性の一員なる自己の内面の心理なるが故に之が本元たる宇宙にして内面は心性ならざるべからず。然れば宇宙内面は同一理性なることを證すべし。形而上的の證明によれば意識と實在との本質同一なりとす。自己の理性が他のと同じきを推して人類の精神生活によりてまた他の生物をも推すことを得べし。他の生物は未だ發達の程度は低きも人類

と同じ形式天則に随つて精神生活を營むものなれば何れも根底は同一なりと云はざるべからず。動物の劣性なる心理的性質は植物と差なく、之が生命を與ふる物質元素の細胞に於ても、植物と動物とは同一にして水中に在つて生活し、細胞は頓て植物ともまたは生物とも何れにもなり得べき性質なり。斯く心理内性は進化の原始に遡りて見れば機制的なるを越へて無機的天然的原質にもまた意志的分子を存せん。天然現存の中に一切に徧して心理内性となるべき本質存在することを知る。

物質も心質も平等理性より實現したる二質とすれば、客觀的存在とすれば、平等理性によりて相待理性の約束を脱し得るなり。物と心とは同物の二變性、主觀と客觀とは同一理性にして、相待と絶對とは其基礎一致せり。生と佛とは其根底は平等なり。若し萬差の性質なるもの其實性同一にあらざれば、實性は絶對たる能はず。相待性の爲めに碍らるゝが故に何ぞ夫れ然らん。相待規定の萬有と絶對の理性と其本性各別ならば、相待規定を脱して絶對理性に依屬すること能はず

一切の萬有は同一理性即ち如來の平等理智を實性とせざるなく、また之に統攝せらる。故にまた相待規定より出たる性情を脱して如來の平等理性に歸趣することを得べき理性を有せり。

内界も外界も平等なり。相待と絶對とは基礎致一の故に吾人が相待を超えて絶對に一致することを得ると共に、迷的衆生の理性と悟的佛陀とは其根底平等理性なり。若し生佛其實性にして根本的差別あらんか、吾人は迷的性を脱して悟的光明性平等性智態に歸入すること能はず。然る時は理性は絶對なる能はず。平等性智は絶對なり。吾人は天則理性より附せられたる佛性が如來の平等性智の光によりて開展する時は、平等性智に致一することを得るものと識る時は、宗教意識は天然の相待規定を脱して絶對の理性に契合し、解脱融合靈化せらるべき理性あることを知るが故に、大に歸依し安立するの理を得たり。

平等性とは、内界と外界と、相待と絶對と、規定と無規定と、生と佛と、迷と悟と、

實性平等にして絶對理性なり。理性の光が自性の中的一切を、絶對理性より、差別の萬物に實現し、而して平等理性自己の光が自性中的一切相待的分別性を開展して自性に歸趣せしむる理性を平等性智と云ふ。一切慧の光によりて照さるゝ時は絶對平等性ならざるはなし。

相待分別性質

絶對平等性が何によつて相待的差別の萬差の性質と變ずるや。實性は無規定にしてまた無定相なるも、本質内容に無盡の性徳を具して、一切能力に實現せられ無定相が一切の定相を規定す。

理性は唯一にして一切差別の性相を包括し、種々に變易し分類す。延長し開展するに隨つて益無量の性を變ず。併しいか程に變轉するも其實性は平等にして内性不可割に統一せらる。内性の平等態の一分の顯動的方面には一切差別の相を變現す。

同一本性が種々に變易する理を、暫く物理的に説明せば、進化説によるに、物質元素の一大元素は單純同一の性質なる、其結合の善異によりて、種々の元素となりぬ。一大元素同一の中に相愛するものは接近を欲し、相憎むものは離間を欲す。相愛する分は集合して力の起點を生じ、之を極微の分子と云ふ。既に起點を生ずれば他よりも強き力となりて、愛する者は彌加はり、元素となり物質となる。相憎む分は、合同の爲めに緊張せられて、反抗の力を生ず。集るもの益集合して、重厚となり、反抗するものは益稀薄となる。現に物質は重厚の極にして、消極の力を集めて陰動し、稀薄の極は即ち今日の精氣にして、積極の力を集め、物質に對して陽動す。宇宙現象界は物質と精氣との陰陽二動の争ひより出づと。陰陽二氣の別る、所以なり。

物質一大元素より、陰陽兩動の争ひより、地球の冷却せし後光線と電氣との刺激によりて、生物組織の元質を生じ、炭酸水窒の化合物が元形質の生命となりて、原始的生物は雌雄の別なく同一の自體の中に自ら二性を含蓄し延長して二つと分れ兩方共に

また二個となりまた相ひ分れて、斯の如くに分る、繁殖作用あり。其中に自ら生殖的形式あるが如し。

同一細胞が進化し偶性をなすに至りしは進化説によれば生物繁殖作用に身體組織の物的變易の理法あり。佛教に所謂異熟性の如し。物が異種に變すべき理法なり。異種に變現するには必ず内性に變易を生じたるや疑ひなし。此の變易理性が竟に雌雄の兩性と變じ兩性の偶合によりて兩性の感應によりてまた之に應化しまた前の形質に類似する形性を遺傳す。佛教に之を等流と云ふ。雌雄兩性は本同一性が努力により同類の諍争が自然に變易して陰陽剛柔の性となり、其内性を表する相に於ても雌雄は其相貌を異にす。雌雄は物的生命の性を異にすると共に心性に於て相異れり。

生物學者のヘツケル曰く、生物の原始に存する雌雄の細胞が相慕ふ力は元素の調和力より來ると云ふの外に解し難しと。最も進化せる人類の男女相慕ふ情はまた此力の發達したるものに外ならずと。

平等性態が變現する萬物には種々の有機的機能に複雑なる聚合的素質の爲めに着色せられて千差萬別の性質を現すに至る。

人の先天的性質に種々に差異あるは、物質的に關係あること、先天には遺傳として性質を類似せしめ、精神的組織にも身體の組織にも、神経質と粘液質とは陰氣にして、多血と膽汁なるは陽氣なる如き、後天にも年齢の變移により、身心疲勞營養不充分的爲めに、機能状態の變化を生じ、また疾病等の爲めに性質を變化することあり。何れにしても物質と精神との性質上に關係あることは争ふべからず。物心二質は平等性なればなり。

後天に精神生活の性格を變ずる機制的生理的の機能の精神活動の記憶性格心情等。性格とは一定の動機に印象し之に相當せる動機を起さしむる腦髓分子の素養なり。心情とは一定の感情的印象が同様の感情を再發せしむる腦髓分子の素養。斯る精神状態は生理規定の複合の機能にして生理機制に混合の結果なり。

意識的自覺人格は相待なる有限の機制にのみ、意識は知覺に規定せられ内容は感覺的形式を離れ、感覺より受し寫象も内部の活動するものも人の感覺は相対的受感性、自覺は一定の内容を有する意識にして相待世界意識に生すべき精神生活にして、我を意識せば之に對比する非我を立てざるべからず。此に於て主我の意識は天然生活を支配す。

唯識論に末那と云ふ。彼我を分別する精神なり。主我によりて我癡我見我慢我愛等の執意的感情起る。此に願望不快感等すべての對比的感情は主我によりて生ず。また愛憎慘忍好惡矜哀等は彼我分別より起るべき感情なり。また記憶心情性格意識自覺感情等の人格的精神生活を必要として有するものは平等性が生理機制の複雑なる聚合中に變現したるに外ならず。是等の精神性質なるものは平等理智を離れて其れが本性能あるに非ざるも、機制的着色のものを平等性とは簡別せざるべからず。人格には自覺主我に屬する對比的感情及び意識甚た多し。人格意識は理想の向上するに隨つて相待

的規定の拘束に満足すること能はず。

人格意識は天則の理性より出て、後に歸趣の理性ある方便としては必要なものなり。人格意識によりて天則の精神生活は相互の競争によりて進化向上して社會的生活人類的生活となりては益平等性が天則の中に現はれ來りしものなり。

本來人類は同一理性が生命進化の天則によりて數多分類し種々に變易しいかに變化するも同一の形式より進化したるものなり。生命進化の爲に分類變化したるものは終局目的には相対的主我人格的意識を超越して平等理性に歸することをう。

心靈的生活に進みて發達したる理想即ち宗教意識は天然の生活の理性には満足すること能はず。主我意識は益向上なる理想を壓倒す。主我の根底に立つて高尚なる理想無限を希望する如きは到底自家撞着を免るゝこと能はず。人格自覺及び天然意識に依屬せる相待規定を脱して絶對理性に依屬せんには、自覺の根底たる理性を開きて平等性智に歸入せしめざるべからず。

性智は一切の自覺的意識を開きて絶待理性の大安立の地を得せしめんが爲めの光明なり。

分別即平等性 歸趣の理性

有限人格的意識自覺は相待規定に出でたる性格心情生理機能の着色によりてなり。一切の自覺は世界的意識を生ずるも其生理規定の實性は一切を包括する統一的平等理性なり。

宗教意識に感情及び性格に於て圓滿に完全を求む。然るに其不満不快感は局部的心象の上にもみ見るべきも、之を脱して圓滿に完全なる状態に到らんと欲せば實性なる平等性に合一せざるべからず。

天然の意識は未だ自己本來平等性の個體現なることを識らず、實に主我を執し不快の感情不満の意志はとても脱すること能はざるなり。

自覺開展し、自己全く平等性の局部實現にして、表面は個人の如くなるも内面不可割に平等性に一致したる意識は、相待を脱して絶待依止の地を得たるなり。先の自觀が一大自觀に冥合し觀念的に絶對觀念態を意識せるよりは、平等性觀には自己の本性が全く絶對理性と同一理性にして、如來は絶對自己なりといふことをうべし。自己と絶對理性と同一の理性なればなり。自覺なるものは彼に對比する自覺を超えて絶對自覺を實性とするが故に宇宙として一大真我ならざるなし。平等性智の光にて小我の迷執霽るゝ時我即ち一大真我の個人現なりと知る。

主觀と客觀と、相待と絶對とは、同一理性にして空間無限の世界を通じ時間無限に貫徹して變易あることなし。全く平等性智現する時は、無限の空間を盡して自己の有限も同一理性なるを知るべし。

本來平等性智は一切萬差を通じて理性平等自性の智能ならざるものなし。然るに衆生は自己の性智を眞性とするに拘らず、迷に依つて自ら分別して、主我を計し彼我を

隔て、物と心とを異とし、依と正との二性を見る。相待に規定せられ生滅變轉究りなし。抑も自己は是れ平等性智態なりと意識せざりしが故なり。自性の最深の根底を究むる時は平等性智光を放ちて照す。即ち知る天地同根、萬物一體、生佛不二、依正同一、物心一致の平等性即ち自己の實性なることを。

生佛不二性

衆生は天然素質に覆はれて垢穢の性格たり。佛陀は一切の垢質脱却して眞善の靈性態なり。然れども主我に屬する垢質を脱して自己の根底に歸入する時、絶對眞我如來の靈性と冥合し、能歸の心性と所歸の靈性とは平等の理性なり。但し主我迷妄のみあつて分別の妄見の波浪を起す。妄我の波靜りて自清性淨の眞我の海は滿然として浩漭として涯りなく三際を盡して變易なし。此に於て初めて自性眞我の父に逢ふて本來自己如來の寵子なりしを知る。自性の底無限なれば洋々たる歡喜は胸中に湧き出で新鮮

なる活氣濃厚なる和風風靜に八宏を歌ひ。絶對眞我の眞善の泉源より善湧出し、眞性は不變にして永恆常然。至善は萬徳の歸する所の海にしてまた一切の道德を生じ、内外不二、生佛平等、相待規定を離れ絶對無規定平等の性地に超入し、自己は是れ平等性智の一化現、生物規定の有餘依身は相待規定の約束に遷轉するも、眞我の空は普く十方に通じ三際に徹して、去るもなく來るもなく、常恆不動にして大安心の地なる平等性智を得たり。之を生佛平等の性致を得たりと云ふ。此の絶對理の性智態は個人自覺の窓には一大自覺と意識せられ、また一大眞我と目せらる。此の泉源より感情には無限の靈福を流出し常恆不斷に宗教的感情を安立し無限の靈福を實現す。

如 來

性智の本相絶對理性態は一切を超絶したるが故に、吾人の生理的性能と相待意識とは平等性慧を説明すること能はず。但し自ら證入して自性と絶對自性と冥合して自ら

之を證し之を意識せんのみ。一切分別の性を離れたる自性即ち自ら冥合的に一致すべき性智は本來清淨にして虛徹靈照自性天真。

本來純粹至精平等理性智能即ち如々の性と如々の智とのみあつて法界に周徧す。生物機能の性質には主我及び是に屬する執意感情等の人格的性格の爲めに覆はれて眞性を現はすこと能はざりしが、平等性の光のよく是を開展して其契機となりて個人の眞性を顯示す。

絶對平等理智の顯現たる萬類の中に、三惡は理性潜伏して闇黒の状態となり、人には生理機能人格、自覺人格理性として現はる。生理的着色を免れず。二乘は偏真空性消極の片面を證す。

佛陀は平等性智は絶對にして一切萬有の自性にして、此の理性は凝然眞如に非ず、即ち一大眞我にして、如來の平等性智は至眞にして、一切の迷妄一切虛假の性を脱し、超然として至眞なり。如來の性智は一切生理的罪惡の状態を超絶して至高善のみ。不

靈福の状態を越えて至美態なり。

性 智 の 用

人が天然及び垢質の心理的狀態を脱せんとせんには、此の性智光によらざるべからず。此光は神的照鑑として、個人の理性に現す。人に宿罪と賤命とあり。此天然を起て完全に道德的性格とならんには、自由と必至との致一を認識し、如來の本質即ち平等性智態を直觀し、之に歸命し、此の性智の中に動かざるべからず。是れ高德なり。惡とは主我に支配せらるゝの謂にして、善とは如來性智に支配せらるゝ、理性。自己の自由を知らず、世界の勢力に支配せらるゝ、人は黑闇の狀に、如來の眞我に一致したる精神は自由なり。惡の根本たる主我より善に轉ずるには自己の根底たる性智を開示するの外なし。他律的や隨意撰擇の能くする所に非ず。自己が性智に従ひ心靈の自由に動くは道德態なり。個人意志に惡の發生するは、一切能の力により實現せる個人精神

の主我より起るものなり。然れ共絶對實性は至善の故に、人の天性なる相待的の惡は脱却の爲めの惡にして、至善の目的を顯はす爲めの方便のみ。終局目的には絶對に歸すべき理性あり。之に到る世界過程には善惡の鬭争せざるべからず。

善惡の鬭争は鑛垢を脱却せんが如く、性善を顯はす爲の手段なり。終局至善に到達するを目的とす。世界は自由と必至によりて進行す。其目的は如來の慈悲なり。

宗教道德とは其性の最高状態は一切の對比を滅し、絶對致一に歸し、平等性智に入り、性智の個人として、一切の意志感情を支配するに至るは是れ道德態なり。

至 眞 態

佛敎三論家は客體を至眞の性智能として、絶對心靈を見る。曰く森然たる萬象の差別は波浪の大海に立つが如く波浪の大海に萬差の波を現す。實象は無象なり。萬差は實性平等を性とす。一切の相は即ち眞空、空が即色なりと。萬象を泯じて一切の戲論

を八不に超へ、實性一如の理を照す。心性の不生を悟り、境智の不異を知る。心は前後際を求むるに不可得なり。大海の浪は隨縁より起る。隨縁の萬差は水性本來平等なりと悟る。三論には一切の相を泯して眞性平等に悟入するを宗教とす。

天台には寂光、如來は境と智とを融し、心性を知見し、寂にして能照す、照にして寂なり、應化は隨縁に現じて而も寂なり。實性は水の如し。萬象は影の如し。影と澄水と不二、境即智、智即境、境智本平等なりと照すを極致とす。

華嚴の（極無自性心）は重々無盡の理を説くも歸する所は因分可說果分は甚深にして説くべからず、宗教の歸する所平等の實性にあり。

宗教意識の求むる所、絶對自己に歸せんとするには、平等性智によるに非ざればあるべからず。物心二なるは絶對に非ず。依正二なるは對比的なり。一切相待規定を脱し時間に空間に絶對理致に到つて、大安心の地を得んには平等性智によりて始めて達することを得ん。是れ性智を圓智の次に説明する所以なり。

平等性智

性智は宇宙心の内性、即ち宇宙心は如來の自性にして、現象界の相待差別の萬物の根底自性なり。宇宙を表面の現象より見れば、紛々擾々無數雜多に差別の性相を呈す即ち天體の如き地上の動植物の如き種々雜多の性をなすも、こは産出せられたる物々の性にして、是を産出するの根底は純一無雜平等性なり。

平等性が世界萬物に對するに三義あり。然も性智の徳を彰す。

一、性智は相待差別萬性の根底。

一切の有機物の成生は根底より自發的。

二、性智は相待差別の萬法を統攝す。

内性に萬差を統制する理性なり。

三、性智は一切生命を向上し終局目的には平等性に向はしむ。

内性より開發すべき理性存せり。

平等性智は宇宙心の自性、一切個々の内性なりとす。性智は人の心理に比して言はば理性に相當す。また人の内性なり。自我また自覺に比例すべし。

宇宙の本體自性の智なり。平等性とは差別性に反對する理性。宇宙に自然界の相待差別と之が根底統一なる平等性あることを忘るべからず。

相對差別性と絶對平等の性とを分別し、差別性の萬物は絶對平等性を根底とし、また之に統制せられ、然して終局目的としては絶對の自性に歸趣せしむべき理性存することを論せん。

初めに差別と平等との二性を分別せんに、暫く唯識論等の三性の名を藉りて、宇宙の本體及び現象界の萬有の性を分たん。三性とは偏執性と依他起性と圓成實性と是なり。初め二性は自然界の萬物に具有する性、後の實性とは宇宙の本體即ち如來の自性

なり。自性とは本然自爾の性徳なり。後天に成生したる性にあらず。また相待に規定せられて成りたるものにあらず。故に自性と云ふ。

初の偏性と依他起性の二性は自然の有機物よりまた自然界の萬有に通じて有する性今是を依他起性を世界性と名づけ、偏性を個性また人性と名づけ、而してこの二性を分別せん。

依他起性とは、世界の萬物は、是非とも相對規定とて、因と縁とが相依りて關係によりて成生す。因獨り成らず、必ず縁を藉りて由つて以て生ず。例へば地球の有機物が太陽の能力に縁らざれば發育すること能はず。陰陽二氣相ひ調和し雌雄兩性相交て成生するが如し。依他とは原因なる自性が自己と異なる他性との關係によりて成る如く陰に待すれば陽氣は他性なり、雌性に待すれば雄性は異性なるが如し。自然界の萬物は一として相待に規定せられざるもの有ることなし。之を因縁所生の法と云ふ。是れ世界自然の性なる故に世界性と云ふ。

次に偏執性また人性個體性。世界性なる依他起性には、本資性の相異なるものが相依り、この交感より成生する所の個々には、化學上の水素と酸素と化合して或る水bec成す如く、また繪具の赤色と青色との調合の如くに、一切の無機物有機物を通じて、因縁相ひ依りて成せる結果たる物々に、各自の特殊性を成すことは理の自然なり。こは世界性の如く普遍性にあらず。世界普遍性と云ふは、陰陽二氣雌雄兩性の交感によりて生物を發生する如きは、何なる生物にも通じて代ふべからざる理性なり。然るに第三の個性に至つては特殊的にして萬人各々特別の性を稟く。父母の因縁より子を生ずるは普遍性なれども、其子の稟くる所の資性につきては特殊的なり。

差別の個人性は一切の有機即ち動物或は植物一々悉く特殊的の性を有せざるはなかるべし。極めて微小なる動物の如きは千萬の數をもて聚め何も悉く同一の性なるが如くに思はるれども、其内性に至つては決して普遍性の裏に特殊性なかるべからず。天則の理性が自然界を發展せんには、不識的平等より差別の方に向つて發達す。故に劣

性なる生物よりは益々高等の生物に進むに随つて、各自の特殊の性能を顯著にす。殊に人類に至つて愈特殊性を著す個性の主之を我となす。人は個人性の特殊なるにまた普遍的に我を執す。我執は人類の普遍性なれども、此我を構成する資性に於てまた特殊のなり。其は個人を構成する資性各々同一ならざるを以ての故に無量の個が各自獨立して我を執す。一切の個人がいかに其性資が能く似ると雖も全く同一なるはあらず。世界無數億の人々中一として形氣の資性特殊ならざるなし。此理は獨り人類に止まらず一切の生物にも推す事を得べし。人性の異りは其面の如く一人として同一なるはなかるべし。近年犯罪人の拇印を徴査するに人の指尖の紋理は各自悉く異様をなして、彼此と相一致する如くに似るもの六百四十億の中僅かに一個の割合なりとす。次に他の動物はまだ意識的生活に入らざるを以て意識の主我ならざるも、個々の特殊の獨立性の存する事は決して否定すべからず尙ほ之を擴げて一切の植物にも及ぼして個々特殊性の存して人と同じき性が伏在する事は理に於て許さるべし。

生物を構成する有機が種々の因縁によりて一切の個々は特殊の差別性をなす、之を機制我とす。一切の機制我が相互に自他を角立し彼我を對比す。性に於て此の相互の懸隔は世界差別の方面よりはとても全く接近一致すること能はざるなり。然れども各自の根底なる内性を開きて平等の自性に入つて初めて接近一致することをうべし。

圓成實性とは神性または如來性と云ひ、前の偏依二性の根底なり。一切の特殊の個々の性は自然に普遍的にして因縁の相關によりて生成せり。この根底たり統一たる圓成實性は宇宙萬有の最終根底にして、世界萬物は相對規定即ち因と縁との關係を離れて生成せる物一としてあることなし。然るに之が根底たる實體の本性は、因縁より成りたるものに非ず。故に相對を超えて絕對無規定なり。宇宙全一の本體にして、圓滿にして缺くる處なし。本然本有の理性なれば造作を離る、故に成と云ふ。自然現象界の萬物は生滅變化極りなく、常住なるものあることなし。然るに本性はもと永恒不變恒久遍在統一平等の眞理の性の故に神性或は實性と曰ふ。實性は相待規定を超て絕對

無規定、絶對の圓性は一切差別を離れたる故に平等性なり、然らば一切の根底は總べての規定を超え差別を絶したる平等性智即ち絶對理性とも云ふべし。

實性は時間空間を超え一切差別を絶し絶對平等、宇宙として同一の自性ならざるなし。故にまた大我と名づく全一大我には自己の外に一物もある事なし。然るに本性は内我の如き心要素を離れたり。故に絶對理性と云ふ。之を實性となす。

神性は前二性に對し、根底實體と統一攝理と終局攝取の三能あり。

前二性は自然界に現れたる差別の性、後のは宇宙の本體にて、終局歸趣の實性なり如來攝取の光明は自然を超えて如來の自性に歸して永恒の眞性に趣く。

性智は實性の光なり實性は性智の體なり。體と光とは體と見、相と見るに外ならず

一、性智は萬有差別の根底

萬物は内性より自發的、内性無盡の性を具備す。

視よ自然界の萬有が大にしては天體の無窮より小にしては地上の一切生物に至る迄因縁に依つて成るもの、一切の個々の差別性を成すもの、一として起伏隠顯生滅變化せざるものなし。此の生滅變化の萬物が起伏隠顯をなす世界性と個性なるもの、生滅變化差別性の物、其物自身が、本體根底なりとは、唯物論者の主張する所なれども、吾人は之を肯定する事能はず。

自然界の相待に規定せられて生成する所の一切差別の萬性、即ち一切生物が発生するには、本より因獨り起らず必ず縁と待て初めて生成するは勿論なれども、一切有機物には自己の内性より自發的に生成するは、例へば稻の種子は之を土地に播きて潤熱等の縁によらざれば萌發すべき理なきも、然れども外部より其助縁を與ふるとも、自己に自發すべき性能なからんか、いかでか萌發すべきものぞ。一切の動植物が生成化育の理に於て同じく自發的ならざるはなし。自發的自治的なるは之が原理なかるべからず。即ち一切の萬物の自性の根底が平等性の一大原理に依據すればなり。一切の萬

物は此自性の根底を離れて生成するものに非ず。有機物の個々は表面は一々各別なる如きも、内面の自性は平等性と連絡す。之と連絡せる限りに於て、一々自己内性に自己を開発すべき性能本能伏在せり。例へば動物の卵子又は植物の種子よりまた完全に發達し後老衰し萎靡するに至るまで、皆自己の内的性能ならざるはなし。是等内性の自發に秩序あり條理あるは皆性智の作用なり。

内 性 伏 藏

平等より差別を發展す。

全一なる宇宙の内性と一分たる個人の内性とは根底に於て一體の理性なりとすれば平等の理性より一切差別の萬性は、如何なる内性より現出したりやの疑問は起るべし宇宙心たる如來性は平等にして、絶對理性態なりとすれば、萬差の種性の淵源を説明するに由なしとは説かなれども、平等は絶對一如なり、如來の自性は平等一如なり

と雖も一如は無定性なり。無定の一性は消極的の無性にあらずして、積極の無定相なるが故に、無性は性として性ならざるはなし。平等無定性の一理より、一切差別の萬性を開發す。これを如來藏性と名づけ、また胎藏と云ひ、平等性の中に一切の萬性を含藏するの謂なり。

世界一切の相待より一切個々の萬性は平等性より開發せられたるものなり。絶對平等性は相待差別の萬性を發展すべき根底なり。性智は萬物の根底内性にして、圓性は陰陽雌雄等の如き相待性を離れて絶對なり。之を如來自性にして宇宙の内性、一切萬有の根底とす。

性智は統一攝理

統制と規定

宇宙萬有の相互の關係に就いては、一切萬物を統一し攝理する所の理性が存在する

ことを承認せらるべし。視よ自然界の萬物が天地無窮に散在し存立するを、天體の星宿は空間的には一の太陽系として數百千の屬星を率へ相互に關絡し、各々の恒星は夫より一層大なる聯絡をもつて縁を成し、無窮の因縁相關より網の如くに連絡して空間に繋り、小にしては地上の萬物が相互に相係り因縁相係りて地上に散在す。また時間的には天體は一切の星辰が成じては壞し壞してはまた成じ、成住壞空因果的關係をもて展轉して連絡し、自然界の大小となく擾々紛紜たる萬物が外部より瞻望する時は相互間に何の關係もなき如くなれども、裏面に於て最も深密なる關係の存せざるはなし。

地上の萬物中に就て有機物が因縁相依りて成立し因果相緣りて相續す。夫婦相關親子の關係空間の關聯時間的の連絡が一元祖より廣く分布して世界に彌蔓し親子相續して千萬代に相續して人類の原始より現代に至るまで親の精核は子に結び千萬代を通じて一系連綿たり。世界に繁盛せる群類は一莖に布ける枝條に外ならず。

獨り人類のみにあらず生物原始の本源より今現の人類に至るまでの生理的相續の絲は連綿として繋れり。吾人が生理的生命の絲を操りて生物の元祖に連り、劣等なる生物の血脈を播きて人類は存せり。此連絡は生物の内性によりて繋れるものなるを疑ふべからず。空間的の世界に擴り時間的には萬代に至り、これ内の生活の性能に於て分離すべからざる理性の存在することは否定すべからず。こは生物の關聯につきて論せんのみ。

自然界の萬物、天體の大なるより一切生物に至るまで、宇宙間に現存せる萬物に就て活動を見るに、いかに擾々紛紜たる中にも、自然が萬物を生成するには秩序の整然たらざるはなし。唯物論者が自然の働きを説明するに、萬物の生々活動は之を成立する物質の非理性的分子が盲目的に聚合して偶然に發生したる結果なりと云ふが如きは吾人は肯定せざる所なり。萬物が自己より自發的に生成するに理論的規律に隨つて動くべき理性を存するも、秩序の整然たることは萬物自己が自ら統攝するにあらずして

物自身よりは高等なる理性によりて統攝せられざるべからず。統攝の性は盲目的非理的にあらずして、規律的理性的なり。譬へば人に四支五官其他一々の骨節筋肉一々の細胞に至るまで各一統制を成すれども、それよりは高等なる人體と云ふ一の統一制をなせり。人の眼は能く視耳は能く聞くも身體と云ふ統制を離れて能く視聽の用をなすこと能はざるが如し。

人の身體の一切の四支一切の細胞は身體に統制せられ、一切の個人は一國に統制せられ、國の團體は一世界によりて統一し、すべての惑星は太陽系によりて統一し、一切の天體は宇宙全一によりて統制せらる。宇宙全體の統制を離れては太陽系と雖も活動すべき理なからん。一切萬有を統一し攝理するは萬有内存の性智のなす所なりと云ふべし。

規定の原理

性智は萬有内存の理性とし天則秩序の理として自然を規定す。性智の自性は絶對に

して無規定因縁より生じたるに非ず、因果に規定せらるゝものに非ず。然れども一切萬物の時間的空間的に因果律に規定する規定を離るゝものあることなし。此のすべての規定の一大原則は性智とす。一切大小となく秩序の整然たる理法條理の修然たる一大原則を性智とす。

終局目的としての性智

宇宙萬物に統制の理條理の常然たるは内存性智の然らしむる所とは論じぬ。而して内存の性智は一切の生命を向上し發達せしめ、發達の頂點として人類は理性的意識として生存せり。而して相待なる因縁所生の衆生の性は、因と縁とに規定せられて、其形氣の性は悉く特殊的にして、差別的小我の團體なれば、其性格皆特殊的差別性をなし、而してまた生理の自然として自他を分別する小我の性も、其根底に於いては平等性智と一致し、最深の奥なる一大真我と調和し、即ち平等性智の本體は絶對圓成自然

の性にして、一切諸佛平等證入の境と相應する所の智なり。

終局の歸する所は、性智の光は、清淨本然たる自性天真の象なり。自性の光即ち終局の自覺なり。真正自覺の體は即ち大我なり。大我は即ち宇宙自覺なり。如々の智と如々理と相應したる所。

釋迦牟尼無上正覺の自性清淨の性智現前して、平等性は一切衆生の最終の理趣自性の根底を大悟す。即ち絶稱して曰く、奇なる哉一切衆生具するに一切智自然智平等智有せり、之を開示する時は一切諸佛と異なることなし。

諸佛如來平等證入の智は即ち平等性智現前なり。本覺の性智と始覺の性智と一致したるなり。

性智は天地萬物の根底自性にして、此一大性智は内性より萬有差別の性たる衆生の根底なり。また性智は一切の小大となく之を統一し、また精神生命を向上し、終局目的には生命を向上し、心靈を開發し、諸佛平等の自性に證入す。此義を以て性智に三

義あるなり。

性智の光 近縁

平等性智は一切萬有の自性の光なり。一切衆生機制我の分別性の爲めに、自他を差別し彼我を争ふ。若し性智の光に攝取せらるる時は、如來自性光中に在り。一切の個々なれば一切の時とし一切の處として接近不可離の因縁をなせり。

また性智と衆生の靈性とはもと同一の眞性なれば、吾人の靈性は一大靈性の個體現なりと云ふことを得べし。即ち宇宙心の清淨なる自性が妄想分別の雲霧れたる窓に照せる光なり。

また吾人が内性の主たる我は機制我を超えて一大眞我と一致することをうべし。吾人の妄分別を離れたる無我の中に現じ來る我は大我の個々現なり。大我中の一切衆生の靈我として現れたりとすれば、一大靈我の内面に於て一體なり。故に大我を離れた

る一切の内性なしとすれば、一體の眞我中の一切なれば、已に空間を超え時間を超えて平等性中にありて接近不可離なり。

また換言せば自覺と大自覺とは本來一體の故に接近不可離の因縁を明す。衆生の妄想分別の自は各自性質を異にしたまた經驗を殊にす。各其性に随つて自分勝手にして、自他平等彼我一體として適應することは到底望むべからざるも、分別我を離れたる性智の源より起る理性は平等の眞性なり。故に萬人共通す。彼我一致すべし。いかにとなれば眞理は我(分)離れたればなり。

宇宙萬物は平等より差別へと發展し、差別の終局は平等に歸す。

内性自發的順序

宇宙が自然界を發展し、自然界が無機界有機界を發展し、終局に歸趣する傾向を見るは、一部分なる地球上の生物生命の發達の順序に就いて考ふるも、平等より差別に

發展し差別性の向上發達の終局は平等に歸するなり。

宇宙内性の自發は動物生殖の本たる卵細胞と精（）細胞と結合する所、自發的精神は全形體細胞及び卵中に存すのみならず最始の原形質原位にも存せり。原形質は寒溫の刺激を感知し運動を現はし營養を攝取す。微生體また氈毛運動となれば水中を遊造す。

萬物の内性には自發的には是の如き性能を有す。生物の精神性質の差別と平等との階段を考ふるも、無機有機合一一微なる生物の精神は無機元素より得たるものにて、一切生物また發生せるは必ず無機の結合より生ずとすれば、無機元素化合の結果其自發的活動より有機原形質を生じたるもののみ。生物進化の理によりて考ふるも、生物の最も劣等なる原始的生物の内的性の如きは最も單純にして個々の性質に差別なきに非ざるも、人類の如き高等に發達したるものの内的性質に比すれば、其差別の度に於て平等に近きこと勿論なり。

人類と雖も原始の人類の内性は單純にして、益々内的生活の向上するに隨つて益々内的生活は複雑と成り、個々の内性が複雑に進むに隨つて個々の内性が特殊性を著くし、爲に差別の度に於ても隨つて顯著なり。人類内性の特殊的なるは人々面貌の一斑らざる如くならん。

人類よりは一層原始の生物に遡る時は、其内的生活の機能が甚だ單純にして内性に於てもまた單純なり。すべての單純なるものほど同類の内性が平等に近かるべし。最原始生物の内性に至つては最も平等に近かるべし。生物よりは尙遡り生物有機性の原料たる無機物に至つては其内性尙ほ平等なるべし。ヘッケルは生物を五階段とし、一として自發的活動ならざるはなしと論ず。五階段とは、一最下等の有機體には往々生長の運動のみ。二、多くの原始生物は粘液質物を一方に分泌して匍ひ又は泳ぐ運動をなす。三、水に浮ぶ生物水母の類は水の滲入により或は空氣吐出の方法によりて其體量を變じて昇降を自在にす。

自然界の内的は平等なるもやはり内性は不識的精神なりとは學者の主唱する所、然れば即ち自然は平等性より内性自發的に自然より太陽及び地球等を發展し、地球に於て無機物より有機物を發展し、有機物は原始的生物より漸次に向上發達して單細胞複細胞脊椎動物陸棲動物乃至高等動物より終に人類に至つて發達の頂點に達せり。

悉く生物を發達せしむるには之を資成する外界の關係を待つべきも、然れども自己の内性に自發すべき性なからんか、いかでか發達することを得ん。

嚮きに陳べし如く自然の平等性より乃至原始生物を發展し、幾千萬の階級を経て人類に進み、益々内性が特殊的となり、我と他との個々の性の差別が劃然となり、隨つて内的生活の我執も著しく發達し、意識的に我見をなす。

個人的内性を構成する所の要素に就いては、男女の異性の如きは世界性にして内性にあらず。特殊的内性を構成せしはいかなる關係によりて千差萬別の内性をなすやとの問題に就いては、因と縁との感應の關係を離れては成立する者に非ざるは勿論なれ

ども個々の自性も種々に變化すべき性を具せり。

内性の成立を説かんには因と縁との關係あり。人の先天的要素に本能と直覺とあり其本能を資成するに後天的に外圍の事情に規定せらる。先天の要素。本能と理性とは普偏性にして内性の我となる。また肉體の稟質に於ても種々に分つ。希臘のカーレンは人の氣質を四種に分つ。一、多血質、呼吸や血液循環が活潑快活にて熱し易し、二膽汁質、筋肉能く發達し威嚴あり。三粘液質、精神が鈍癡忍耐強し。四神經質體瘦せ頭が大きく神經鋭敏。かく四種と成るも四質を相互錯綜して又種々に分つべし。後天の要素は先づ四圍の境遇に約束せらる。地勢にも關係す例へば山岳の人は獨立勇氣の象に富み偏狹に傾き易く、平坦の地に栖む人は快活にして自治の精神に乏し。田舎人は質樸にして都會に育つ人は輕薄に流れ。また家庭により教育と社會の事情とは人の性質を種々に變せしむ。家庭には學者の家と商家と軍人と職工とは大に其氣風を殊にすまた社會の状態は大に氣風に影響を及ぼす。太平の時代と戰國時代との境遇は個性を

殊にす。また列國でも英國氣質日本氣質と云ふ如く其國風は自然に個人性に及ぼす事大なり。

内性即ち稟氣の種々に分かれる原因に就いては衆說紛紜たり。或異教の如きは人は祖先が神に背き罪を犯したる爲め人類は悉く先祖の罪を生れながら稟けてあれば全く惡なりと云ふ。

また或説には定命論とて、自然に天運循環し其人の生年月等は其内性氣質を稟る所以なり。十二宮十幹六十等が悉く天の命運にして人間の關する處に非ずと。例へば子の宮は滋とて吝商の氣をうくと云ふ如し、之を定命論と名づく。又遺傳因縁説あり。

佛教にては因縁説、人の性質の特殊的なるは天運に非ず悉く之れには元因あり。また此元因を資くる助縁あり。因縁をもて内性を規定す。靈魂輪廻三世因果の因縁説は信すべくも證明すべからず。

今暫く心理學者の説を以て個性の成立せる因縁を説かば特別的個性を成すに就いて



先天的即ち因は過去の宿習が生れつきの性となる。過去の宿習に、業識の上にとまた父母の宿習遺傳として子に遺す如く、この因に二あり。根本的の本能性と直覺と、また稟質となり。本能は自然に飢えて食を求め渴して水を需むる如き、直覺とは人が善惡等を自然に判断する性を有するは普遍的の元因にて、是れ精神の働きなり。また肉體即ち物質にも稟質あり。

先天後天即ち因縁の關係によりて内性を成立す。因縁相同じからざれば、自然にす

べての人々各々千差萬別世界人類中に於て恐らく特殊性に同一なるものなかるべし。

單純平等性に近き原始の生物より向上發達の終局たる人類に至つて内的生活の状態また腦髓神經の構造の如き益々複雑に進み、複雑となるに従つてまた特殊的個性が著しく各差別の度強し。故に自然は生物の内的生活なる内性を成立するに平等性より差別性に發展す。

進化の目的。

物質即ち肉體も精神も何か進化の目的を有すとならば、内的生活なる精神にありと云ふことをうべし。いかにとならば、自然より發達して無機物を現化し、無機より進みて有機物を現化し、植物より動物は發達の度高し、動物の本能より人類の意識的精神に進み、同じ意識的精神の人類の中に最發達したるは人類の聖人なり。普通の人を凡夫と云ひ超絶したるを聖と云ふ。聖人とは肉體の發達に非ずして精神が圓滿に開發し内的生活が完全に向上してすべての人類に内的生活を完全に發達せしむる徳能を有

せる人を聖とす。之に依つて之を見れば、生命進化の目的は精神にありと云ふことをうべし。さればとて身體の發達を無視するにはあらず。

終局目的はまた差別性より發展して平等性に歸す。

生物の内性が單純なる平等性に近きより進みて差別性に進み、人類中につき益々文明に進むに隨つて差別なる個性を重んず文明國に於ては個人的資格を重んず。差別性の内性が完全に發達し而して後各個人の内の生活内性は那邊に進むべきやとならば、佛陀なる大聖の教ふる所によれば、内性向上の終局は、差別を超絶したる眞理の極なる平等性の方面に向つて進み、終局はつひに眞善の極まる處、絶對平等性の光に歸するのみ。宗教には差別の我に固執し我見我愛の甚しきを凡夫と云ひ、平等無我の眞理に契合せるを聖者と爲す。

佛敎小乘大乘二乘に偏圓權實を談ずれども、人性の差別我を超えて平等性に歸するは一轍なり。

小乗の聲聞の終局目的として、平等無我の涅槃界に歸入するは、真空無我の眞理に證入す。是れ消極的平等の方面なり。

大乘の菩薩は初發心より佛果圓滿の果位に至るまでに進み行く。人性差別的の人性と平等の佛性との二方面の中に、修養功を積むに隨つて、人性を脱して靈性顯現するに、分々に月の盈缺新月より漸々に進みて十五夜に至つて白面圓滿するが如し。人性は黒面にして靈性は白面の如し。

菩薩が八地已上乃至十地等覺に至つて、平等一味のサハニヤに流入し、終局には差別の人性分別及び自然の我執は悉く盡きて如來平等性に歸入する時は、如々の理が如々の智と同じ、一切妄想分別の夢醒めて、自性天真の天は朗かに霽れ、如來清淨の光即ち是れ自性の光なることを悟る。平等自性の光によりて自己を返照する時は妄我分別の影だにもなし。

此に於て諸佛平等の性智は是れシヤナ自性の光明なり。一切諸佛は同一の眞性、十

方世尊はビルの大我を我とす。

一切差別の妄夢醒めて平等性慧は朗かなり。

心性の徹見、禪の一心を明むる悟道は心性を徹證するなり。古人曰、盡十方世界是沙門眼、盡十方是沙門全身、盡十方是自己光明、盡十方世界在自己光明内、盡十方世界無一人不是自己。

光明裡の生活

性智の光に由つて心靈開發したる時は、差別の人性の素質たる垢質を脱却し、純一無雜なる神性に歸し、平等性智の光によりて自性即ち自覺す。

差別我を超えて平等性の光によりて一切差別妄想の世界を照す時は、真理の光の中の差別の性惡を見ること益明なり。

性智の光は常に自性平等を自證自覺即ち認識を照すのみにあらず。性智は實行を照

す標準たり。

神性の光が自己の靈性を照し、神聖なる神の聲として自己の行爲を規定し、また一切の行爲を判斷する標準たり。

斯光に由て心靈開發し來る時は純一無雜なる神性に歸す。神性と一體たるを自覺自證するのみにあらず。神の自性の光が自己の靈性となり、神聖なる神の聲となりて自己の行爲を規定する標準となりぬべし。

いかに如來を見上る。如來は眞理の光なり。如來と共に行き共に坐し共に臥し、一切の處一切の時に於て離るゝことなし。いかにとなれば、眞理はいかなる處と時とに於て離るべきものにあらざればなり。神聖は眞正なる理性なれば、たとへいかに墮落の淵に沈むとも罪垢の中に蘊まるゝとも、自ら覆ふべからざる一條の光、普遍的眞理平等性智の光に。

肉我は主我分別自分勝手、肉我は眞理を標準とせず、唯だ己が肉の幸福欲より割出

すが故に、公平に判断するの明なきなり。

然るに平等性智の光として自我より自發的に自己を返照するが故に、自他を公平に照し公平に判決を下す。

平等の眞理の光より照す時は、神聖としてすべてを規定することをう、また何人とも眞理の標準に順じて何人にも之を規定することを得。

肉我は萬人悉く分別利己なり。眞理は萬人悉く共通なり。故に各々自己は肉の我を捨て眞理の我として如來我に轉する時は、天地と共に一體にして、而も宇宙全一の眞我中の個々の靈我一致する限りに於て、接近不可離の關係をなす。常に大圓鏡智の光中に於て各自の觀念に一致親近するのみに非ず、性智の光によりて、表面は各自別々なる如くなるも、内性に於て一致し靈性に於て近縁なり。

如來性智の光明によりて攝取せられたる各自の靈性は、内性に於て一致し、眞理の光によりて自己を返照し、一切の行爲を判断し、自他平等公平無私の靈性は眞理の極

にして、一切諸佛の自證平等性智が一切萬法の自性にして、此に至つて内證平等なり。此内證平等性の光により、念佛衆生が肉我の差別性を捨て、如來の性智の光に攝取せられたる時、自ら諸佛平等の自性に契ふ。此に至つて内性の一致的接近と云ふべし。

理性の接近。内性の遠近は空間時間の形式の遠近のみにあらず。性智も衆生の心性に對して接近するものは、嚮きに月の漸々に盈つるが如く、眞理の光に靈化せらるゝ毎に、我性滅して靈性増し、眞理の光と靈性とは同一理性の故に、靈化の加ふるに依つて益々接近す。至眞の性智の中心點に近づくなり。是れ性格に於て接近するなり。肉と靈とは正反對なるが故に遠縁なり。



平等性差別性を發展す

宇宙心の内容は絶對的平等の本性、即ち萬有内存は無盡の性能を具備すれども、自性は無性なる平等性なり。

自性無定相の故に、一切の差別性を現出す。

無定相の本性が差別の萬性と開展する原因は、絶對の内容性が、絶對意志に實現せられ、こゝに於て萬差の性相を變化す。即ち之を物理にいはゆる、一大元素より種々の元素と變化すると同じの理、勢力によりて實現せらるゝが故に平等内容が差別の性と變ず。喩へば大海の水が風力に動搖せられて波を起す、力を加ふる故に水は電氣を起し、音響及光線を現する如し。一大心性内性平等なるも意力によりて萬差の相性を實現す。種々の相性を現するも、水の自性は失はず。また水を離れて波の自性を平等心性を離れて萬有の實性あることなし。

平等性

宇宙萬有は如來一大理性なる平等性の故に、本性一元を根底とす。萬物差別の性あり。其能力を殊にするも、歸する處は同一の理性なり。若しは無機物若しは有機物、種々に轉變し萬差の性と能とを顯現するも、其物には平等の理性を離れて別に自性なく、一切差別は因縁和合即ち相制の關係による聚合の假相にして、絶對的不變の實性にあらず。水の熱度の高低によりて液體とも固體氣體ともなる如く、凡そ宇宙間の萬物同一の理性を實體とし、千差萬別に開展し、終局には平等の一理に歸す。

宇宙の實性は平等にして一切差別の性徳を含藏し、之を放ては萬差と現し之を收むれば平等の一理に歸す。

動植物の一元

現に吾人目撃する高等の動植物即ち牛馬や松柏の類に至つては區別劃然たるも、動植物の原始に遡れば一元に歸す。其原始たる一の細胞フロハイオンの如きは動物植物

何にもなりうべき物の如しと云はれ、地球の冷却せる或程度に光線と電氣の作用によりて炭酸窒水の化合物たる有機的組織をなす。此細胞より漸々に進化の結果は、種々の階級的の動物となり、一方には高等なる植物となり、此兩生物の生活的形式に於ては其比例を一にす。

また吾人が植物の穀菜の類を食し、之が同化作用によりて、身體となり血液とも腦髓また神經等となり、感情または意志の精神生活をなす。

糊腐敗して蛆蟲湧き、蛆蟲また元の糊となり。植物は縁に隨て變じて動物の體となり、動物は轉じて植物となり、本同一性の相待規定せらるる性能なり。

學說によれば、化學に八十有餘の元素を分類す。然るに各元素に一定量あるを見れば、歸する處は一大元素とならざるべからず。差別の種々なる元素と成るゆゑは、本平等の一大元素が、唯一の本質に、自から相愛するものは親和し聚合し、反するものは離散し、聚合するものは力の起點を生し、之を原子とす。之か相加はりて極微の分

子となり、また元素となり、物體となる。反するものは緊張せられて、一方は重厚となり、他は稀薄となり、物質は重厚の極にして、稀薄の極は精氣となり、宇宙の一切現象の萬有は兩動の争ひなりと。萬有を組織せる元素は平等の一大元素といふことを知るべし。

物心二界は根本平等

古來の思想家は、一切物質の内面には、吾人が内面のと同一の内的生活存すと。自己が他の内部を知るは類推の理により、自己の内面に自から經驗する觀念及理性等と同じく他にも同一の内性過程の存在を認むるは、吾人は人の外面に表るゝ落涙笑語等によりて、彼の思想感情性を自己より類推して他の内部を知る。斯る類推論は人類より廣くすべての動物界に及ぼすべし。一切の動物は外面は物質なるも内部は精神生活なりと。此類推はすべての植物界にも應用することを得。いかにとなれば、常識は動植物を區別するも動植物はフロテースタにいたりては動物と植物とは區別すること能

はず。しかるにまた動植二物の生活的形式規律に順つて生存するものなればなり。しかれば植物にも内的生活の存在すると云はん。

無機界の天然原子にも不識意志の存すべし。

有機と無機との兩界を通して普遍的平等の理性なかるべらず。此二界は孤立せるものに非ず。常に相交渉相依りて存在す。兩者實質に於ては異なることなし。

有機體の成分は無機體と異なることなし。無機物質轉して有機體となる。人の精神なるものも無機物の中に存在して因縁和合して精神生活となるにいたる。

一切の物質は悉く活動。液體瓦斯の如きは勿論、金石の如きも分子運動は斷ゆることなし。

類推の法によりて無機物に精神ありとするは、自然科学者の中にまた此の説を主張せるものあり。人間の精神と同じきもの普く自然界を通じて存し、之に運動生命を與へつゝある精神作用、地球に於て最高の發展に到達すと。自然即現存の全體に内面生

活の意あるべし。現存は過境的にして意識内容より推して知る外なし。

地球及太陽系の如き宇宙の一部をなせり。また一切の有機無機の無数の小精神を包括せるものにして自から精神なかるべからず。

地球は無数の生物の聚合せる場所にあらず。一切の生命と物を胚胎掏養する母なり。一切生物は地球の所産なり。被生物者の生已に精神あり、能産者たる地球に精神なくして可ならんや。

尙進んで諸天體を包括せる太陽系より宇宙全體に、唯一平等性の精神なかるべからず。人の肉體が吾人の精神の表現たる如く、宇宙現象は宇宙心の表現なり。

宇宙心は平等性なり。

宇宙心の内性は絶対平等、平等の理性より差別の萬性を發展す。

平等性の内容

活ける理性。

宇宙精神の内容本性は一切差別を超絶したる絶對の平等性と云はゞ、現象差別の萬性は何を根底とし、云何なる原因によりて然るや。

曰く、如來の内容自性は平等一如の本性にして、差別の性の如くに、火の性能は水の性能に異り、人の性能は下等動物の性能に同じからざる如くにあらず。宇宙心の自性は、實に相待差別の性を以て名づくべからず。然らば一如平等の自性は恬澹無爲の凝常の如くなるか。曰く然らず。一切差別の性を含藏して而も平等一如なり。即ち不思議的平等と云ふべし。

單一平等の如性に、而も宇宙一切の物心、依正、恒沙の性徳を含藏して、而も常に平等一如なり。之を性徳と云ふ。如來藏性なり。宇宙心の平等性に一切の差別の性を具備するは、たとへば、吾人の脳髓は、自から靜坐冥想して、一切の妄念を排する時は、内に非ず、外に非ず、青黃に非ず、大海の澹然たる如く、本來無一物の状態な

り。然れども脳髓には感覺心情印象記憶を得たる一切の萬象悉く含藏實に複雑極りなし。脳髓内複雑にして而も單一なり。本宇宙心は一切の萬有すべての複雑なるものを悉く包容して而も遺すことなし。萬性は悉く平等なる宇宙脳髓より發現せざるもの一もあることなし。

萬性は現象、平等性智は無形。宇宙心は見聞する能はず。しかればすべて人類の精神にても見聞すること能はざるは同一にあらずや。

如來藏性とは平等一如の理性に無量恒沙の性徳を含藏する義なり。時間に空間に徧在せる一切の物心、天體、及び一切有機、無機、有情、非情、物質、意識の萬物萬差の性なるもの、一として平等一如の性より發現せざるものなし。性また心は不可思議の徳にあらずして何ぞや。自から自己の脳髓を播きて閱せよ、華嚴の中に三千の經卷を一塵の中に納入るの譬有り。深く思へ。

上巳に平等性、宇宙の心の内性は、絶對一如の性態にして平等一如にして而も一切

萬差の本性なることを明しぬ。

是より平等性智の能を論せん。

宇宙の本質自性

宇宙の本質自性は時間空間及一切差別の相待觀念を超えたる、物質にして永恒本然の心靈態なり。

時間空間及一切差別を超えたる絶対同時態、平等一如の理性、一切差別の萬有に性たり。

平等一如と云ふも無爲恬澹超然單獨の如にあらず、一切差別の萬有の性を含藏して而も永恒に平等なり。

例へば凡そ複雑の極なるもの人の腦髓に及ぶものあらざるべし、腦髓には一切の記憶心象感情智力意志等の諸活動を包括して遺すことなし。然れど腦は極めて單純本來

無一物なるべし。常に平等平等にして而も一切の差別を包括す。全一平等の性よりなれたる一局部たる吾人の脳髓已に爾り。況や一切の淵源たる一切を包括する宇宙心の本質の自性に於てをや。全一絶対平等一如、而も一切の差別は平等一如より生じ、之に包括せらる。

宇宙の本質と相應したる自性天眞の理性によりて差別即平等の眞理を意識せん。

一海の水本湛然、風の爲に動搖されて萬差の波浪を揚ぐ。波面に差別を呈するも海水の平等性を變せず。

平等性の内容。

絶対の本質平等一如を、佛教に如々理、如々智と。或は大智慧光明、遍照法界、等と云ふ。如來の平等性の内容は神聖正義恩寵善等を以て本質を表明す。至眞至善至美光明等。

密に性智を配するに因に虚空藏菩薩果に寶生佛を以てす。虚空藏とは虚空に一切萬

有を包藏する如く、性徳無盡に具備して遺すことなし。果分には本能に具備せる性徳の悉くを修得顯現の一切智を實生如來と名く。

實生如來を三界主と名づくは即大我の義なり。

大日を大我と云ふは總、若し内性自性をば大我と云ふは別なり。

平等性に統一したる心性

宇宙は本平等性を内容本質として、差別の萬性を發展するは、目的に歸せしむる手段なり。向上の階級は生物より意識、心靈と發達し、終局には自己の最源根底なる絶對的自性を體得するにあり。

絶對と自己との致一は、前の圓智の一大觀念に自己の觀念と一致したるよりは尙一層、自己と宇宙内容とが親密に一致す。觀念的致一とは象相にして、性智の致一は内容の融合なり。内容融合とは、宇宙内容本質を自己の内容として、即ち一大真我を自

己とす。しかれば萬有は一大觀念中に共通せるのみに止まらず、自己の最終の眞我と萬有の眞我とは一體平等。

眞我の内容を以て自己の内容とす。眞我の内容は理性態なり。本質として云はば平等一如の心靈態。作用として云はば自由大自在なり。

如來の内容と融合し、宇宙無限の内容より自己の内容に湧出る故に、自發的に心靈活動す。

吾人の全身が絶對なる如來の妙身を形成す。

如來の内容と吾人の内容とは融合涉入し、本來一如、吾人の内容は無限の自性との交渉によりて、即ち神秘的に玄妙の眞理を知見しまた融合する状態は妙智の作用とす。妙智の生佛感應等のは本平等性智による。

平等性智と吾人との内容致一の活動としては、無碍光の下に於て説明すべき如來の中の道德的自由なり。

觀察交渉の自由は、平等によるが故に自由なり。

平等性を自己の眞我として、宇宙の眞我より吾人が心靈に發射し來る光明により、萬有を照し神秘を知見す。吾人は内性一如の故に永恆存在なり。

絶對と自己の心性との親密なる關係に至つては、自己の理性と絶對とは平等にして分つべからず。平等の理性即ち自己の心靈なり。平等の理性より自己の理性として活動するものこれ眞理なり。

理性は平等なり彼我なし。

天則秩序としての理性の能

宇宙心の理性なる性智が萬物の内性なることは前に明しぬ。理性の能力を辨せば、絶對なる理性、自己の内在の自然界には、天即秩序の理性として、萬物を生産し開展するの秩序を齎整し統攝するを能とす。

天則秩序の理性としては、時間空間の形式により、因果律に、世界雑多を開展し、萬物を生産し擔保す。表面には悉く因縁相依り因果關聯して、論理的規律なり。

論理的に秩序を整束するを見れば、之を規定する萬物の内面に之を統一し攝理するの理性なかるべからず。

萬物は唯非理的分子が盲目的に聚合し偶然に發したる結果とは云ふべからず。悉く理論的規律に隨つて動くべき定相を萬有中に賦せられ、自發的に生産、内面より自發的に規律的理論的なるは、表面には因果律となる。これが秩序を整ふる統一的理性を性智の能分、天則が理性として現じたるものとす。

三 性 各 別

平等性の中に三性を分別す。

分別執性。一切の一小局部に、全體と同一の體系として、相待的に獨立の統一的體

系をなす。

依他起性。——小局部個々は相制の關係。

圓成實性。——相待の關係を統一齋整する理性。

分別執性とは世界一切の事物は、いかに一小局部といへども、本平等性を本性とする個體なるが故に、全一を模塑とする係系、即ち相待的ながら獨立の統一をなせる活動の相待的獨立の體系をなす。

太陽系はこれと等しき階級の體系に相待的に獨立せる統一體系なり。次に太陽系に屬する各部はまた相待的に獨立の係系なり。惑星を中心として衛星等聚合して統一系あり。地球上にまた一切有機物を相待的統一體系あり。有機體はまた相待獨立の體系をなす。

人は四支五官五臟六腑等を悉く統一して體系をす。眼は數多の解剖的部分を以て統一體系を爲す。一すじの毛も數多の細胞を以て統一體系をなす。各細胞も相待獨立の

分子より成り、分子は同じく相待獨立の原子より成る。極小局部より極大に至るまで同一形式の統一的體制をなす。いかに局部といへども絶對なる實性の縮圖ならざるはなし。小極は小極の體制を以て活動し、大極は大造化の用あれば小極は小造化の用をなす。

局部は體系と共に自發的の調和を保ち自發的活動す。例へば人の腦髓營養系生殖系の如く各局部は各自の性あり本能あり。活動は外部の制束によらず。眼は視る、耳は聽く、各自性あり、自能あり。高等なる官能も劣等官能の職を代ること能はず。

植物はいかに劣等なるものも個々其本性能あり。統一體制を以て小造化の職を成す。松の實にあらざれば松を造ること能はず。各個には小造化の内性ありて、自發的に開展し分殖す。萬物各自性あり自能あり。能く住持し造化す。

一小局部は大極の理性を根底とす。原始一微の細胞の生物より全地の生物を發展するも何ぞ怪まん、小局部は大極の理を根底とす。

二、依他起性。

平等性は直ちに個を造らず、必ず因縁を待つ。一切萬有は時間的に空間的に相制即依他の關係を離れて獨立變化すべきにあらず。いかに微少なる生物にしても、必ず因縁の影響は他の一切に及ぶ。宇宙に存在せる物質分子に一として孤立したるものなく、萬物は一として偶然に生起するものなし。必ず相制の關係を要す。之を依他起性と云ふ。

吾人の頭腦及び一切の局部一として依他の關係を離れて成立すべからず。眼を組織せる細胞は全體ありて始めて眼の用を爲す。一切の局部も皆全體に絡して各自個の性能を果す。相制の關係は終局全宇宙に及ぶ。一の塵芥は庭上の植物の腐敗より生ず。植物は土地により、土地は地球により、地球の存在は太陽により、太陽は宇宙による。一の微蟲を生存せしむるゆゑもまた同じ。空間に存在の萬物分子一として孤立せるものなく、皆依他聚合し、因縁の關係による。各局部の生活はこれまた高等なるもの

との相制に統一せらる。

吾人の生存は父母により、父母はまた父母即ち祖先により、祖先は人類の元祖により、人類の元始は低階級の動物による、動物は原始動物により、原始動物は地層により、地層は地球により、地球は太陽に、太陽は宇宙に、宇宙間の萬物は空間に時間に相互に關聯して孤立なるものなし。因縁關聯して、空間に網の如くに、所謂る因陀羅網の珠の如くに、天體無數の星類は繋れり。虚空無邊なれば天體も無邊なり。之を空間的の因縁の關聯とす。時間的に言はゞ有爲の萬物は原因より結果生じ、結果また原因となりて次の果を來し、成住壞空、空じてはまた成す、因果律によりて關聯して無始無終。

圓性の本。

相待の規底を統一する根底本質は、物質論者は物質原子のエネルギーと、また其上にエネルギーなるものを立て統一原理を説明せんとす。恰も老莊の一大元素を以て萬物

の根底を説明すると相似なり。この元氣なるものは一局部なる人類に云はゞ身體に充る元氣なり。何故に人の元氣の根本は精神なることを認めざる。エーテルの百尺竿頭一步を進めて宇宙萬有の相待規定の根底本性は一大心靈の理性たることを認めざる。

若は空間に若は時間に相待の關聯を離れて萬物一もあることなし。平等性を根底とする世界に相待規定因果律存在するは、この相待規定なるものは、相待それ自から存在すべきにあらず、之を統一する秩序の根底なかるべからず。之を圓成實性とす即ち平等性なり。

圓成實性。

相待的規定の一切局部は關係によりて存在す。この相待なるものはこの關係を統一する理性なり。一切の局部と有機物を統一するは地球、地球は太陽系に統一せられ、各天體は全一に統一せらる。之を統一する理法は、相待的規定の根底は物質にあらずして、一大心靈の平等理性なり此一大心靈に統一せらる。

一切萬有はこの絶對理性に統攝せらるる故に、宇宙の内性は大理性なり。普遍的法則の存在は是宇宙の内性が理性なる故に、萬有を構造するすべての部分は其活動の理法一齊なり。數學の法則重學の法則機械學の法則の如き皆之を示す。

圓實性の萬有に對する特性

一、統一原理、二、普通法則、三、發展目的。

一、萬有相待の關係の統一。

宇宙現象界生滅起伏せる萬有は相待の關係に規定せらる。即因縁所生なり。此相待に規定する秩序の統一は圓實性とす。いかなる微塵ばかりなるものも實性によらずして有るものなし。

萬有の關聯は無窮にして平等性に統一せらる。いかなる微塵も之を離れて獨立變化する能はず。一ケの塵芥も其因たとへば庭の微細なる草は、土地によらざれば生活す

る能はず、土地は地球により、地球は太陽系による、太陽系は全一絶對の統一を離れて存在すべきにあらず。

空間に存在せる物質分子一として孤立するものなし。皆聚合の統一的活動の體系をなす。各々の統一運動は全一體系の部分運動として包括せらる。人の五官四肢等は凡て自體の統一系によりて各職能をなす。宇宙萬有の相待規定の統一は平等の一性にあ

二、普遍的法則

宇宙の内性は一大理性なり。萬有を構造する一切の部分は其活動の理法悉く齊一なり一として普遍的齊一の理法存せざるなし。また此の法則を離れて活動するものなし。數學の法則機械學の法則重力の法則の如く萬有いかなるものも此法則を離れて活動するものなし。一切の變態にも物理を應用するに誤ることなし。宇宙の法則は秩序整齊にして大理性に隨つて動く。この法則の存在するは宇宙の圓實性は一大理性なりと

云はざるべからず。

三、萬有の因縁相待作用は平等の圓性より差別の調和的變態に發展し内的目的論的必然性に自發的なり。即ち萬有に内存する理性が平等の一より差別の變態に發展するは、向上して相待の規定を脱して絶對無規定の自性に向上する理性ありて、必然的、自發的、目的ある理性なり。即ち、

一、相待を統一する攝理の理。

二、普偏法則。

三、天則の理性に終局目的の理性あり。

萬有神論には、萬有の内的存在なる實性が、天則秩序に差別の變態に發展する天則の中に、恰も目的設計をもてなす如きの自然の理性存在す。

原子論は、一般の物理的法則に隨て運動を營む原子の自發的結合によりて起り、も外部より此原子を按排配置する智力を要せず、無數の原子は盲目運動を營み種々雜

多の結合配置より偶然にも動植物の精妙なるもの生ずとす。

然らば一の人を構成する原子偶然相依りて突如として人を現するか。進化説によれば、自然淘汰環象の影響によりて、因果必然の理に基き、自然に生起進化し、今日最も複雑精妙を極めたる生物體は突然に無數の原子集合し生起せしに非ず、單純なる生物の原始より無數の時間を以て進化の結果にして、因果的機械的に生起すと云ふも、進化論と原子論とは親密なる關係あるにあらず。

原子獨立自存のものが互に相影響すとするは矛盾なり。個々の要素を以て終極の單位とし、之を以て絶對的獨立自存のものとし、是等の要素合して全體を構成してなすと云ふ時は、其要素が互に影響すといふことは大なる矛盾ならざるべからず。

若し個々の要素全く獨立自性なりとせば、他の爲に因縁によりて自己の状態を變せざるべし。若し他の因縁によりて自性を變ずとせば、決して獨立の自性といふべからず。

萬有は齊一の法則に攝理せられ、其間に相制の關係あることは、萬物の要素が、原
子論者の説の如く、獨立無關係のものに非ず、萬有は全一の理性に統一せられるにあ
らざれば、相關の事實は説明すること能はず。

今有機體を見るに其一局部に全然孤立せる變化あることを許さず。例せば植物の一
點に變動あらば之に應じて他の部分に變動を及ぼす。世界も全一の體系にして中に於
て孤立を許さず。この過程は他の一切の過程と關係す。

此の全一の一切の相制的作用は平等性智によりて起る。要するに世界は獨立せる無
數要素の集合にあらず、全一の部分に過ぎず。物質過程は內的過程を有す。

宇宙あらゆる運動が相關に統一せらるゝは、全一の精神統一的内性の顯現なりと云
ふべし。

平等性の特徴

一如の藏性、一大心靈內性、

絶對の理性より差別の雜多の形を以て現れしものは、欲望意志は、終局目的に平等性に結合統一せられざるべからず。すべての内的生活の統一ありて、所有る個々の性向は平等理性の自己發展自己現化中に包含せるものとす。

平等性智の特徴。

一、世界的內性全一の理性なり。

差別の一切の局部の個々は絶對獨立自性を有せず。個々は平等性を自性とし、平等性の相対的差別の一員なり。世界は絶對の理性なり、萬物は一理性の變性なり。

二、平等性は質碍及び意識の二性の下に差別の性に發展す。

但し意は眞の本性にして物質は感性に映する現象のみ。

三、客觀界に於る因縁即ち相相互作用は平等性が自己を差別の調和的變態に發展する自性、目的論的必然性の現象なりとす。即ち絶對理性の自由なり。理性は論理的に必然

性を以て自己の本質を發展す。

平等理性。

一、相制の統一性全一。

二、一切の差別は平等の性内面より自然自發的の調和を保つ。

三、全體としての萬有は外的の制裁を受けず其自發的性能。

平等性の必然的理性は目的論的平等全一より相待差別に發展するは、向上の目的あればなり。約して云はゞ、一より一切に開發し、一切は平等の一に歸す。平等性智が差別を發展するは終局の全一に歸せしめんが手段なり。其目的とは地球の發展は生命現化を目的とし、生命の發展は心靈の現化を目的とし、心靈によりて平等理性に一致することをうればなり。平等理性智の光明によりて自己の理性は一切萬物と調和することをも。

進化の理性

宇宙の本性は平等理性とし、理性は萬有の内性として存在し、萬物を向上發展せしむる性の根底は平等性智の智能なりといはざるべからず。地球の發展を見ても單純なるものより複雑に發達し、此の發達の理性は、萬有が自己の根底に、性能を本能的に伏藏し、環象と共に發達する理性を有す。生物の進化の理につきて考ふるも、原始動物の細胞の中に種々の階級に向上すべき性能を潜伏すと云ふも不可なからん。萬物の生命は平等性を根底とすればなり。生物生命が内性を有して、それが性智を性として、其内面に向上すべき性能を有し、原始生物の中に其高等なる人類に成りうべき伏能を有したるものと云はざるべからず。

萬有の内的存在の理性、萬物と共に漸次に向上せしむ。

平等差別の性となるは向上の手段。

相待世界の發展差別性となるは向上の手段なれば、理性の現化たる生物生命は、炭酸窒水の化合物の形質に酸化と彈撥力あり。酸化は生活力の元氣、彈撥は發動の元、

また消耗の原なり。此酸化と彈撥によりて消化と分殖作用起る。消化は自己を保存し分殖は種族を保存す。

此二作用は生物を向上せしむる機能なり。

進化に五則あり。一生物の生存努力。分殖の爲に生存競争の努力。二變易。身體組織の物質が自然に變易すること、これによりて種類を生ず。三應化。身體が外界の刺激に感應す。之を應化の理法と云ふ。四遺傳。形質遺傳の理法。五適種生存。

生命を萬物の外部より研究すれば、五則によりて生物の進化の理明なり。この物質を內的に規定する理法は自焦律の根底たる平等性と云はざるべからず。

内存の理法によりて萬物向上進化すとは、外面よりは因果的に發達し、内面よりは内性の目的必然性より、平等性が目的性を内部より發展するなり。外部には因果的の進化を見る。分類するは競争によりて目的たる向上の爲なり。ますく分類の差別の多くなるに隨つて競争し、競争すれば發達す。

分身せざれば相互の刺激によりて向上することなし。

生物生命の同一理性

宇宙は平等理性なり。此理性表顯して物質となり。物質は理性を根底とするが故に一切の生物と顯る。平等の理性は一切の差別と顯現するも相待的に統一の體系をなして存す。

一體の進化。原始生物の一細胞にも獨立統一の體系をなす。絶對の理性を根底とする内性を有すればなり。故に極小の生命は極大の個體現なり。極大理性が大なる造化なる如く極小も小造化なり。極小の生物に内存の理性は、一微細の元形質より、炭酸化合物の一個は分れて二個となり各また分れて分類し、雌雄兩性を分つに至つては合體して分類す。最微少なる生物より分殖し應化し種々に變易し遺傳して、自然淘汰の理性に進化せられて、單細胞生物より複細胞、水母、脊推、陸棲となり哺乳動物と進

み一體の分子前の元形質より分れて、分派してつひに世界の生物となり、また人類となる。一體の分身にして時間的に子子相續し、空間的に分殖派生して世界全面に蔓延す。時間的には子々相續して一系連綿たり。空間的には分派連絡して綱の如くに連なり、生命一體の分身、斯く表面には個々差別の波浪を分別すれども、同一の平等性の海水に統一せらる。一切の階級を問はず、すべての生物は、悉く個々皆獨立の統一的體系をなすと雖、萬有内性が即ち絶對理智と名づくべき理性の存在を承認せざるべからず。自然界の萬有は局部は自發的の調和を保つものにして、外部より規定せられず、その運動は自發運動。

目 的

萬有の小部分なる物は目的設計は意識的にあらずして、自から目的に適合する理性存在するは其目的は何ぞといふに、地球の發展は生命の實現を目的とし、生命の向上

は意識の實現を目的とし、意識の向上は心靈の實現を目的とし、此心靈の發展を世界の目的とせば、斯く世界に必然的に向上して心靈の實現せるは、宇宙の平等性より差別の變態を發展し、向上の終局には宇宙の内容自性天真の光明に一致せしめんとする目的なりと云ざるべからず。人の小兒の不識の意思が漸々に發達して意識的に現化するは、外界より之を補助して居るにあらず、小兒の自己に伏能が發達した結果意識的になる。宇宙に自然界地球及植物等は眠れる精神にして、人類は他の生物に比較する時は覺醒したるものと云ふべし。然れども人類の覺醒は相待的にして、他の生物に對するが故に云ふ。絶對的の覺醒は宗教最終目的にあり。目的とは各自己の靈性は絶對なる平等性と一致する處にあり。平等性智を發見し、性智と一致し、性智を全く自己の内容となす處にあり。性智を體得したる時自余の萬有と本質内容全然調和することを得。平等性智によりて萬有の内的生活の起元と存在をば能く理會するを得。

宇宙の内容本質は絶對理性即ち平等性智なり。平等にして性は無定相。而も一切差

別の性能を有して、而も常に平等なり。本質内容を性と云ふ。一切差別の萬有の性能を具備して而も平等、これ平等靈性なり。

此平等靈性によらざれば萬有の元理を説明すること能はず。此平等靈性を離れて唯物論によらば精神の起元及萬有の秩序調和等を説明する能はず。平等性の眞理を體得する時は吾人はこゝにありながら神の中に安立し絶對的に自由を得。

宇宙の性は絶對平等。現象の萬物は千差萬別。この差別のものは絶對意志に實現せらるる假相なり。相待に約束せられ、力に動かさるゝものは、一として假性ならざるはなし。萬有の眞性は常に平等一如なり。一切の差別は悉く假性、實性は永しへに平等一如。眞性は絶對にして規定を離るゝが故に平等一如なり。

差別の相を離れて超然に絶對の平等を求むべからず。差別の假相に執着なく、自性天真の絶對的心靈を自己の性とする時は本來生佛一如なり。

平等性智

圓智は如來の本質一大心靈を相の方面より見たるものにして觀念態とせり。性智は如來の一心靈の性として絶對理性態とす。同一の一切智慧を觀念的に相とし、また理性的に性として、相は表象にして、性は内質なり。人の精神にて云はば甲は觀念にして乙は理性なり。

人が瞑想觀念すれば、物體を徹して、一體の觀念態となるは、宇宙の一大觀念態中の個人なれば、固形の物體あるに拘らずして觀せられると共に、宇宙萬物は萬物の理性によりて系統せられ、萬物は互に隔離せるものにあらず。若し理系あるに非らずば吾人は如何にして解し得る事を得ん。理系あるによりて理性の普遍を推して、種類の萬物を推論する事を得。宇宙萬物は平等なる理性に統べらるゝが故なり。本如來は絶

對理性なりとは、此の理性の光明によりて、宇宙萬有を照鑑すること、平等性智と名づく。

平等理性の秩序

絶對理性に統一せらるる宇宙なれば宇宙は一大理性なり。宇宙は一大理性に係りたるを以つて、萬物を一貫して一理に歸す。人が理性を以つて推理したる原則は變態多き萬物にも何れにしも應用する事を得。其の推論する處宇宙萬物は數學の理、物理學にしても推理法ならざるはなし。一切萬物が規律の整然たる條理あるは一大理性に隨つて動くものなればなり。

秩　　序

萬物天則秩序整然たり。宇宙に常恒に建設的衝合の行はれ、永久の自動自活をなす。太陽系のみを見るも遠心力と求心力と能く調和し、また遊星の運行の如き秩序在る統

一の規律正しき天體が序をあやまたず。

人を解剖學によりて見るも、腦髓神經の構造、營養機關生殖機關に至る迄如何に奇妙を極めたるか。人類のみにあらず植物を構造する細胞組織、柔軟組織、纖維組織より種子の萌發、根の外に、數多なる細胞より花咲き果實を結び、營養生殖の理に至る迄。動物學の理に於いても如何に細なるも小は小にして之を組織する秩序あり。例へば種々無量に分類するとも其の中に其を構造するに理系を失はずして、この生物の組織法を以つて他の生物の理をも推理する事を得べし。宇宙如何なる植物生物礦物にも理系の存せざるなし。

宇宙は理性智

自然則とは天地運行の秩序に關する眞理を觀察して、或る現象の原因結果の理を推して、その現象の精細なる觀察によりて理を發見し、更らに進んでまた一則の大なる

を生ずる所以の理を考へ自己の想像より推して學説を立つるにあらずや。理學の原則は宇宙萬物に存在す。宇宙は理智によりて秩序を以つて原因結果をなしてあるものなれば、宇宙に存在する則を以つて原理とす。人の理學は宇宙に基かざるべからず。宇宙の理智に問ひ彼に學ぶ。

宇宙が萬物を造化し構成し組織するに理智によらざるなし。宇宙が理系によりて造化し組織したるものを離れて自然科学あることなし。

宗教は理學にあらず。理智が自然界を天則秩序的に整へたるも之を識るのみにしては、理智が放ちたる或る一面の成績を見るに止まりて、未だ理智に證入したるものにあらず。人は同じく理性によつて賦せられ、また組織せられたる自性なれば、自己理性の本源に入りて、一大理性と冥合し、この理智を以つて自己の性として、理智の光によりて、宇宙の玄底を照らす。

現象界の萬物に理系の存するは理智の成績には相違なきも、理智の眞面目に非らず。

理智の自性に非らざるなり。例へば人が作りたる秩序正しき文章を見るも、其の文章に於きて、之を作りし人の理性を推す事を得るも、文章そのものが人の理性に非らざるが如し。

宇宙は一大理智を以つて天則秩序を整へて、能く萬物を構造す。又宇宙は萬物の事實の上に大理想を示す。

宇宙は理性ありて一體

宇宙は現象の方面より是を見れば、天體無數の星宿より萬物一として別々ならざるものなし。然れども理系より推して觀ずれば、一として孤立するものに非らず。宇宙全體は一理性に統べらる。譬へば人の五官五臟六腑は各別の職を司るも實は人の身體に屬して一體なり。かく五官の作用は反對せる官能なるも、若しその身體を離れてはその官能の作用なきが如し。日月及地球に於ても宇宙を離れて獨立に活動すべきにあ

らず。況んや生物に於いてをや。宇宙は一體なり。

生命一元

地球の萬物その類多しと雖も動物植物礦物の三類に過ぎず。礦物は金石空氣の總稱即ち無機物なり。動植物は共に有機物に屬す、各機關ありて生存生活生殖生活を爲す、故に生物と云ふ。動物及植物は高等なるものに至りては判然たる如くなれども、其の原始に遡つて見れば其の差別辨じ難きあり。動植物は其元一つの細胞なる、水中に一個の球形小粒體あれども獨立の生活を爲す、營養し生殖す。此物は原形質といふ。濃厚なる液體の如き物質、外に薄膜あり體の一部に球體あり。動物と植物と區別なき動物の原始なる最小の細胞にありては無生有生と稱し難きあり。

生命一體とは、原始の最下等の動物より進化し分類し繁殖し、生物の身は個々に分ると雖も一體より分身し、同一生命が分類し、又分身せざれば繁殖せず。分類し繁殖

するは競争し進化せるなり。分類は進化の手段なり。個々の生命は自己は自己の目的と謂ひ居れど、一部は全部の手段なり。一體が競争進化のために數多に分類したる故各個體は個體としての責任をなすべし。

横に數多に分類するは競争によりて向上せん爲なり。豎に子孫に遺傳するは代々時間的に進化せん爲めなり。同一理性を眞髓とする生命、進化の手段たる個人は、向上に努力して義務を盡すは、常に個人の爲めのみにあらず、一大生命の爲なり。生命進化の階級は人類に至るまで甚多し。原始單細胞生物より複細胞、水母形、脊椎、陸棲哺乳より人に至るまで同一生活の形式が漸々に進化して人類となる。生物生命の因果的相續は同一理性の則に基けるなり。

生物生命が進化の階級ありて其類は種々に分るれども、同一生命が相續し來たる。無核蟲有核となれば生命は核にありて、核の外は生命を助くるに止まり、分殖作用は其の核が分るるなり。核を含む生命が分れて二つとなる。七八回分殖する時には生命

稀薄となり、生物が雌雄の別あるに至れば、進める生物の生命は核中にあり雌雄の核を合して分殖す。而して生命は核中にあれば外包は度々代るとも生命有る核は一系連綿として、養ふては分殖し、千萬代に萬億歳をも續きて連綿して生命一。

横に人類は一體の分身として、時間に空間に全世界と通じ、億萬年を徹して同一の生命にして同一の關聯たることを知らば、同一理智は生物生命の理にも顯はれしを知る。

理 性

人の性格記憶寫象は十人は十人ながら同じからざれど、理性に至りては百千人理系によりて共通す。

吾人の理性は絶對理智の光明が吾人に交徹靈通して個人の理性と大理性との關係未だ密なるものにあらず。

一大理性は意識不識にかゝはらず、一切の人類を貫通して遺すなし。人類のみならんや、宇宙全體に虚徹靈通せる理性なり。

理智は眞理なり吾人は絶待理智につながるに於て宇宙眞理と共に語り之と相通す。理性は一切人類をつくし、空間を盡し、一切萬物を貫き、時間を徹し、永恆變ることなし。天地位し萬物秩序をあやまたず、天則あり、秩序あり、條理あり法爾の理あり。

理智は心靈の最深にして、絶對理智に交通し同化するは倫理の極致。

吾人の理性は一大理性の分にして、其間には毫の隔つべきなし。吾人終局の歸する所はこの一大眞理に歸するにあり。

此の理性につながるが故に如來に冥合する事を得。十方三世の諸佛と理性を同うす、一切の衆生に此理性あればなり。

平等性智

絶對不識大精神。無邊光には平等湛然として大海の如く、如來の覺性は法界に周遍して平等覺性なるも世界性には無明の爲めに種々世界無量の差別の境界を顯はす。

十界の依正宛然として顯現す。是暫く現す鏡中の影像のみ。信論に三界は虚偽唯心の所作、心を離れては則六塵の境界なし。一切の法は皆心より起り妄念より生ず。一切の分別即ち自心を分別す。心心を不す、相の得べきなし。一切世間の境界は衆生無明妄心に依つて住持す。一切の法は鏡中の像の體の得べきなきが如し。唯心の虚妄、心生すれば種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅するを以ての故に。

覺の義とは、謂はく心體念を離れ、離念の相は虚空界に等しく偏せざる處なく、法界一相、即是如來の平等法身、此法身に依て説いて本覺と名づく。何を以ての故に、本覺の義とは始覺の義に對して説く。始覺は即ち本覺に同じきを以て。乃至不覺の故

に諸の種々差別の相を見る。一切衆生を覺と名づけざるは本より來念々相續して未だ曾て念を離れず、故に無明と名づく。若し無念を得れば而も實に始覺の異なることなし。四相俱時にして而も有り。皆自立なし。本來平等にして同一覺なるを以ての故に。

如來の絶對精神は無意識にして性智周徧せざる處なき、十界差別の境界は悉く世界的心理より種々の種類を現すれども、平等の性智の大海に無明の風より動する波の如し。風と波とは實體あるに非ず。風やむときは波止みて湛然たる平等性智顯現すべし。我ら自己の根底もこの世界の根底も、みな如來性智の海ならざるはなし。自己の根底に我なく絶對理性の光のみなるを知らん。

如何にせば我等及び人類も此世界も悉く彌陀の本智海の浪たるを證明すべき。

先已に如來妙觀察智によりて人格精神の根底は如來の深き信仰の中に恩寵と機能致一に開示せられたり。各自己意識が之を證明せば個人の意識は他人と同じく廣くは一切衆生と同一の佛性。認識觀念には世界も同じく絶對なる神の中なり。然れば精神の

内界も外界も表面より見れば大に異なるも、其根底に至つては同一平等性にして差別なきことは、觀念と佛知見とにて自ら證明する處ならずや。

然れば世界も觀念的にして未だ意識なくも、心理意識とは其本質に於ては同一性なりといへども、現象には異なり、一は觀念にして一は意識實現なればなり。

本性は平等なれども、現界差別界とは一に非ず、異に非ず。信論に覺と不覺と二種相あり。同相と異相。

同相とは譬へば種々瓦器皆同じく微塵性相なる如く、無漏と無明との種々の業（心）相皆同じく眞如の性相なり。色相は唯隨染業幻の所作なり。是智性其ものには非ず。異相とは種々の瓦器各々異なる如く無漏と無明隨染幻の差別性差別の故に。

衆生の本體も世界の根底には同一性にして彌陀の身中。

此平等性智の光明によりて吾等が實際の根底は主我に非ず。一切の世界も其根底に至つては、同じく絶對なる彌陀の自中存在なることを顯照したまふ。